

田辺市におけるひきこもり支援

(「ひきこもり相談窓口」開設4年目)

平成16年4月～17年3月

和歌山県田辺市

目 次

ひきこもり相談窓口の体制整備と支援活動の状況	1
田辺市ひきこもり支援の体系（資料1）	1
相談状況（資料2）	
支援活動	2
1 家族会への支援（資料3）	
2 自助会への取組（資料4）	
3 居場所との連携	
デイケアへの支援（資料5）	
就労サポートにおける支援（資料6）	
4 啓発活動（講演・研修会）視察・問い合わせ（資料7）	
ひきこもり検討委員会の活動（資料9）	4
1 啓発講演会・研修会の開催（資料8 - ）	
2 処遇困難事例の検討	
3 自助会の取組について	
担当者の想い	4
1 ひきこもり支援における今後の課題・・・保健師 目良宣子	
2 窓口の担当となって1年の思い・・・嘱託員 松下直樹	

資料

資料 1	田辺市ひきこもり支援の体系	6
資料 2	相談実績	7
資料 3	家族会の実績	1 1
資料 4	自助会の実績	1 2
資料 5	デイケアの実績	1 8
資料 6	就労支援の実績	1 9
資料 7	啓発活動・視察・問い合わせ	2 0
資料 8 -	講演会のまとめ	2 2
資料 8 -	研修会のまとめ	3 1
資料 9	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況	4 1
	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会名簿	4 3

参考資料

参考資料 1	日本児童青年精神医学会報告書	4 4
参考資料 2	保健師業務要覧改訂版執筆「思春期保健 ひきこもり」	4 8

ひきこもり相談窓口の体制整備と支援活動の状況

ひきこもり相談窓口を開設して4年目に入った平成16年度は、ひきこもり検討委員会の支援を受けながら、着実に支援の体制の充実を図ってきている。これまでの相談は、保健センター内の当日の空室を利用しながら、担当者一人体制で取り組んできた。しかし年々の相談件数の増加と、家族や関係者からの要望もあって、相談ルームが保健センター内の一室を改造して確保され、相談員も嘱託員として1名増員された。

相談活動は、家族から本人へとつながりが徐々に増えてきて、更には集団づくりへと発展してきた。家族会は行政から独立して自主運営となり、青年らの自助会を育てていくために走り出した1年であった。

相談は、家族は月に1回、本人は2週間に1回を基本にして継続し、必要に応じて家族内の調整や、本人同士の交流の中での調整に力を注いできた。またひきこもり支援における先進的な取組をしている民間との連携によって、親の会の交流や青年の体験発表や交流会等、家族や青年らが元気をもらえる活動にも広がった。

これまで3年間の取組の実態は、ひきこもり検討委員会のオブザーバーである精神科医山本 朗氏が、第45回日本児童青年精神医学会において報告した(参考資料1)。

田辺市ひきこもり支援の体系 (資料1)

相談窓口の重要な役割として、ひきこもり背景の見極めがあり、ひきこもりの状態を、大きく分けて 精神疾患・発達障害 社会的ひきこもりに分類する。 については、適切な機関に紹介するとともに、既存の社会福祉制度(公費負担制度、療育手帳等)の活用につないできた。 については、家族支援、本人支援に分けて展開していくしくみになっているが、一定の力をつけることが出来れば、その機能を行政から自由度の高い民間に移して、ニーズに合わせた活動の広がりを期待しているところである。

相談状況 (資料2)

相談件数は年々増加している。これはひきこもりの特性が長期にわたり、相談の継続の必要性が高いためである。必要に応じて関係機関をつないだり、家

庭訪問を実施している。

支援活動

1 家族会への支援 （資料3）

平成 14 年 6 月から開始した家族会は、「ほっこり会」として自立。窓口で社会的ひきこもりと見られる家族を紹介したり、月 1 回の例会に参加して支援している。先進的な取組をしている「エルシティオ（和歌山市）」の親の会との交流や、「京都オレンジの会」の青年らによる体験発表会の開催等、自由性のある活発な活動に至った。

また、「エルシティオ」主催の映画『青の塔から - ひきこもり脱却への記録』の鑑賞会及び「京都オレンジの会」との交流会では、家族会の親と自助会のメンバーとの交流が図れた。

2 自助会への取組 （資料4）

平成 16 年 1 月から行政で開始。社会的ひきこもりと見られる青年を対象として、月 2 回開催している。最初は 5 人からスタートしたが現在 21 人となっている。1 年間の平均参加人数は約 8 人である。当初女性は 1 人から始まり、なかなか増えなかった。そこで、女性は男性に比べて母親とのコミュニケーションがとれているため、まず母親同士がより親しくなれるように「女性の親の会」を 7 月に 5 人で開催した。すると、4 人の女性が 8 月から出てこれるようになった。そこで「女性の会」として、10 月から、月 1 回開催し現在 7 名になっている。参加している青年は 10 代後半から 20 代がほとんどであるが、30 代の青年が初めて参加すると、若い人たちとは話しにくいことや就労へのあせりを分かり合える場がほしいということで、30 代の会を平成 17 年 2 月から 4 名で開始した。

本年度は、自助会 1 周年記念として、「京都オレンジの会」の青年らと交流会を開催した（当日のスケジュールは資料 4 - ）。歌手のおーまきちまきさんを交えて、また、日頃自助会の活動を応援してくれている関係者を招いて、自助会設立の経緯の紹介（寸劇のシナリオは資料 4 - ）や体験発表（男女各 1 名、資料 4 - ）を行った。全てメンバーが主体となった手作りで、会場設営のための作業や各発表の練習等、約 1 ヶ月ほどかけて準備をすすめてきた。自分たちで役割分担をしたり、どのように進めたらベスト（ベター？）なの

か、自分たちで考えを出し合って、メンバーが皆で協力し合って一つのことを達成するという取組が、メンバー一人一人の力を発揮する体験とともに次に向けての力を貯める活動につながったように思う。

今後の課題は、準備の段階では参加していたが、当日大勢（7～8人くらいが限界のメンバーが多い）の中には参加できなかったメンバーや自助会自体に参加するのも相当のエネルギーを要するメンバーと、今回交流会に参加したメンバーとの温度差をどのように縮めながら自助会を継続していくかにある。この点については、既に自助会を自分たちの手で運営していけるようになっていきたいと考えている今回参加したメンバーらは、自分たちの課題として考えていこうとしている動きが見られている。

3 居場所（ハートツリーハウス）との連携

デイケアへの支援（資料5）

就労サポートにおける支援（資料6）

居場所が主催のデイケアには、市の窓口担当職員を1名派遣している。平成14年12月から開始しているが、この1年間の利用状況は平均3人であった。デイケアを通じて新たに居場所を活用することになった青年はゼロだった。しかし就労を希望する青年が多く、居場所が委託契約している就労支援を利用した青年は2名であった。

4 啓発活動（講演・研修会）視察・問い合わせ（資料7）

田辺市のひきこもり支援について取材をうける機会が数回あった時、家族会の家族や青年自助会の青年が、「私たちが顔を上げて語った分だけ支援の必要性について理解が広がる。支援者だけに頼ってはいけない。」と話してくれたことが印象に残っている。今後家族や青年及び支援者のネットワークが、地域に限らず全国規模で広がり、ひきこもりに関する理解を更に深め、支援の輪が拡大されることが望まれる。

講師依頼も近畿圏内で数回受けることになり、出かけていく機会があり、各地域での状況を知ったり、支援者の方から励ましをもらったりした。また反対に田辺市まで遠くから視察に来られる機会もあり、互いの意見交換の機会にもなった。

田辺市の特徴としては、地域での社会的ひきこもり近接領域である民間の社会資源や人材に恵まれていたため、官民が有機的に連携できるようにつながってきたことによって、ひきこもり相談窓口の支援が進んできた。今後更にネットワークを密にし、社会的ひきこもりに関わる支援者の発掘や人材の育成が今後の課題である。

ひきこもり検討委員会の活動（資料 9）

- 1 啓発講演会・研修会の開催（資料 8 - ）
- 2 処遇困難事例の検討
- 3 自助会の取組について

本年度のひきこもり相談窓口の活動の中で、最も力を入れてきたのが自助会の育成である。親の会の独立に 2 年かかったのと同じように、青年自助会も将来的に独立できるように、ここ 2～3 年かけて支援していくことが目標である。親の会と青年自助会が連動して活動していける場についても考えていきたい。ひきこもり検討委員会の中では、自助会での取組を評価し、活動の効果を指標として表していくことが今後の課題である。

地域の中で官民のネットワークを生かしつつ、居場所や親の会や青年自助会、学習や就労支援等、ニーズに合わせて選択できる社会資源がいくつも用意されることが必要である。また、平成 17 年 5 月、5 市町村の合併を目前にして、ひきこもり検討委員会の構成についても検討していかなければならない。

担当者の思い

1 ひきこもり支援における今後の課題・・・保健師 目良宣子

ひきこもりという現象は、最近話題となっているニートと合わせて、広がってきている社会的な課題である。ところが社会の目を気にして本人、家族ともに苦しんでいるにもかかわらず、相談機関につながりにくいという閉鎖性を持ち、実数が把握しにくい。そんな中で勇気を出して来所する本人や家族の相談からは、ニーズの高さを窺えるとともに、次代を担う若い人たちへの支援として、第三者の介入をなくして解決の方向性が見出しにくい。早急に支援体制が整備されたいと感じるが、周辺町村や県内でも支援の輪が広がりにくい。そこ

には、ひきこもりに関する社会的な認知の不足とそれに関わる支援者の不足があげられ、充足していくためには予算的な裏づけが必要である。

今年度、保健師業務要覧の改定にあたり、ひきこもり支援について必要な知識や技術、心構えについてまとめる機会を得た（参考資料 2）。

ひきこもりという状態を現わす背景が、生物学的に分類されるものと、生育における環境上の要因や本人の性格等複雑に絡み合い、また個人としてではなく、人との関わりの中で生じる不適応であったり等、支援活動には色々な場合を想定した個別の対応及び集団作りが求められる。1 対 1 の信頼関係を基本にして、集団の中で人と折り合っていく力をつけていくためのトレーニング、人との距離の取り方やコミュニケーションのあり方等を体験できる場を徐々に増やしながら、それを調整していく支援者が必要である。

支援者にはストレス耐性力や人間関係調整力、医学発達の知識等、求められる資質が幅広くなるため、支援者が研修を受けられる機会や先進的な取組をしているところでの体験、支援者同士の交流（学びあい、支えあい）のできる場が必要であると考えます。

ニート(NEET=Not in Education ,Employment or Training)とは、教育や職業訓練を受けず、就職もしていない若者のこと

2 窓口の担当となって 1 年の思い・・・嘱託員 松下直樹

昨年 1 月より体験的にディケアに参加し、今年度の 4 月からひきこもり相談窓口担当としてひきこもり支援に関わることになった。1 月の段階ではひきこもりについて何も知識がないまま当事者と関わるが、全くといっていいほど何もできなく、場に居づらさも感じた。これは支援がわからないことがあるし、その場に自分の存在意義を感じられなかったからだと思う。それにひきこもりを特別な人たちの特別な状態と思いすぎていたことがある。ひきこもることで人との関わりを持てずに生きることがどういうことなのかよくわからなかった。それまでは知的障害者の作業所に勤め、人や社会とのつながりを持てることに喜びを感じていたが全くの雰囲気の違いに戸惑った。

しかし、4 月からは家族や当事者との相談で家族関係の変化や、集団活動の中で新たな人間関係を繋いでいく人たちの変化を目の当たりにする日々が続き、その中で「ひきこもる」という行為は日々の生活の延長にあるもので決して特別なものでないと思うようになった。また、今の社会がいかに生きづらいか、肌で感じることができ、自分自身の価値観を揺さぶられる一年だった。

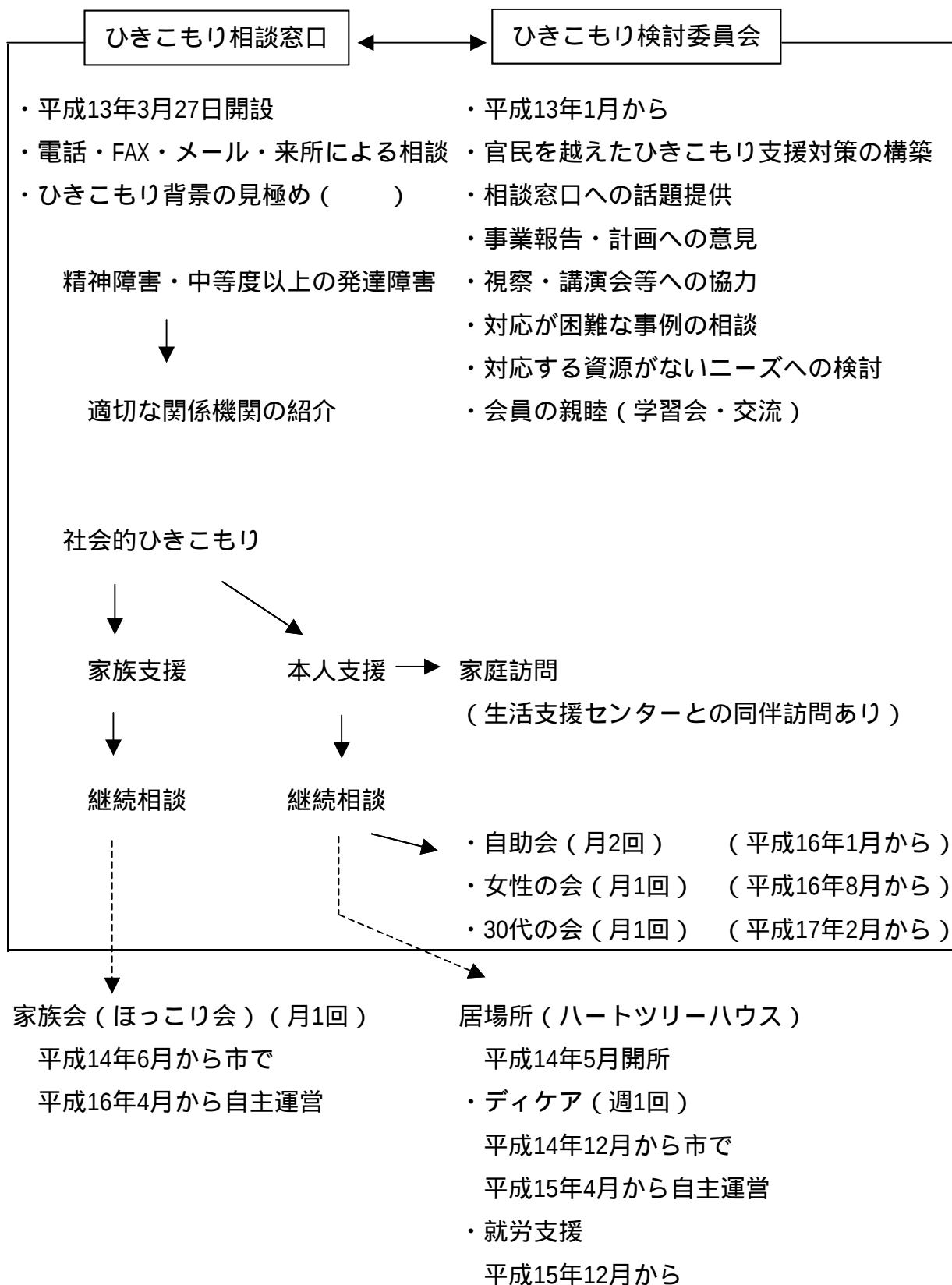
資 料

資料 1	田辺市ひきこもり支援の体系	6
資料 2	相談実績	7
資料 3	家族会の実績	1 1
資料 4	自助会の実績	1 2
資料 5	デイケアの実績	1 8
資料 6	就労支援の実績	1 9
資料 7	啓発活動・視察・問い合わせ	2 0
資料 8 -	講演会のまとめ	2 2
資料 8 -	研修会のまとめ	3 1
資料 9	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況	4 1
	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会名簿	4 3

(資料 1)

○ 田辺市ひきこもり支援の体系

(実線枠外は民間実施)

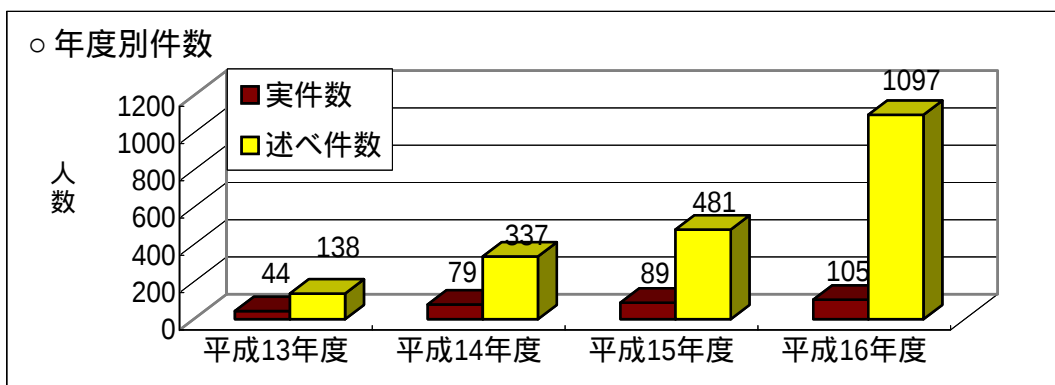


(資料2)

○各実績

○ひきこもり相談窓口実績

- ・相談窓口開設以降平成17年3月末までに、273 家族 284 件の相談あり。
内171家族182件はH15年度までにあり。



平成16年4月～平成17年3月までの状況

○月別相談件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
電話	7	11	11	18	16	23	
来所	28	28	36	47	61	61	
訪問	0	0	0	0	0	1	
メール	3	3	4	3	8	13	
合計	38	42	51	68	85	98	
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
電話	17	112	61	22	39	17	354
来所	61	63	38	65	40	36	564
訪問	1	3	2	2	1	2	12
メール	5	21	15	47	24	21	167
合計	84	199	116	136	104	76	1097

・相談件数

	実件数		延べ件数
	初回	継続	
電話	45	8	354
来所	22	22	564
訪問	0	0	12
メール	6	2	167
合計	73	32	1097
	105		

・医師の相談
宮本Dr 3名
山本Dr 5名

・相談者(初回)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者
49	10	1	18	6	1	3	16

その他	計	
7	111	6件が重複。内訳は本人と母(1)、両親と本人(1)、母と民生委員(1)、母と姉(1)、教師と本人(1)、本人と弟(1) 関係者→医師、教師、彼女、市職、民生、知人、メル友、他機関

・相談者（延べ）

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者
342	32	41	705	46	1	2	13

その他	計
4	1186

89件が重複。内訳は本人と母（75）、父と本人（2）、両親と本人（7）、母と民生委員（1）、母と姉（2）、教師と本人（1）、本人と弟（1）

関係者→教師、彼女、市職、民生、知人、メル友、他機関

・年代別男女別件数（105件中）

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計
男	0	17	16	22	4	2	61
女	1	15	13	4	0	0	33
性別不明	0	0	1	0	0	10	11
計	1	32	30	26	4	12	105

・居住別（105件中）

市内	42
合併	7
市外	46
不明	10
計	105

・相談結果（実105件中）

継続	41
紹介	36
その他	28
計	105

継続

・相談の継続、自助G、家族会、HTHの紹介者を含む

紹介先

・大阪府立こころの健康センター（2）
 ・精神保健福祉センター（13）
 ・フレンドスペース（1）
 ・ハートツリーハウス（1）
 ・京都オレンジの会（1）
 ・神戸オレンジの会（2）
 ・ハートフルハウス（1）
 ・エルシティオ（3）
 ・淡路プラッツ（2）
 ・病院（7）
 ・やおき（4）
 ・市町村保健師（1）
 ・保健所（3）

その他

・関係者からの相談のみ（3）
 ・本人、家族から相談のみ（24）
 ・既に利用機関あり（1）

○継続41件について

・継続分類（41件中）

社会的	28
不登校	6
精神	2
発達	4
不明	1
計	41

・居住別（41件中）

市内	23
合併	5
市外	13
不明	0
計	41

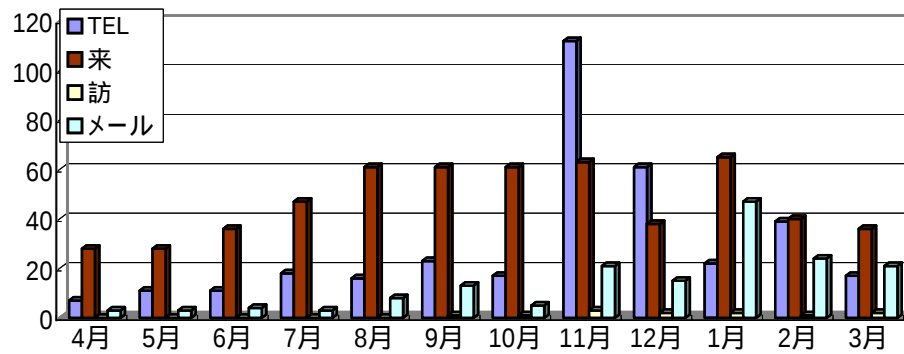
・継続状況（重複あり）

自助G	21
家族	15
医療	18
HTH	4
（ディケア）	9
（就労）	3
終了	3

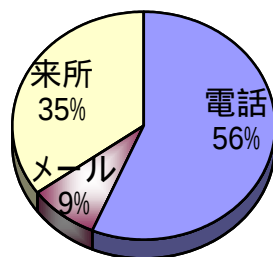
・年代別男女別件数（41件中）

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計
男	0	5	8	9	1	0	23
女	0	10	7	1	0	0	18
性別不明	0	0	0	0	0	0	0
計	0	15	15	10	1	0	41

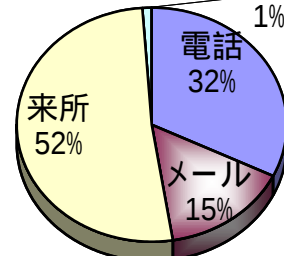
○ 月別相談状況



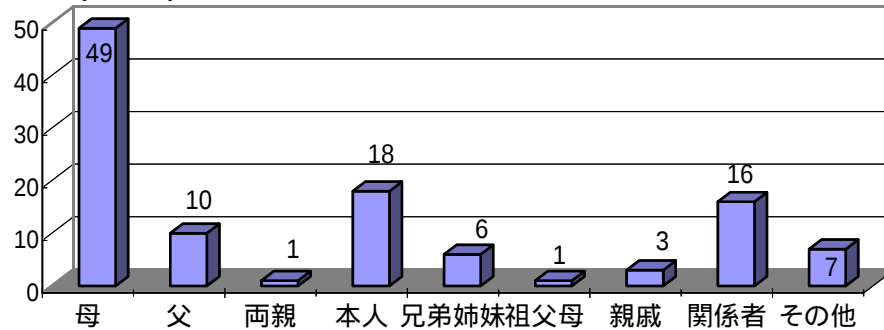
○ 実件数（105件中）



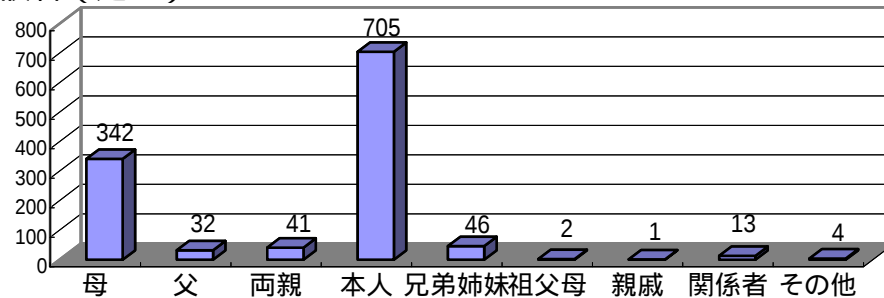
○ 述べ件数（1097件中）訪問

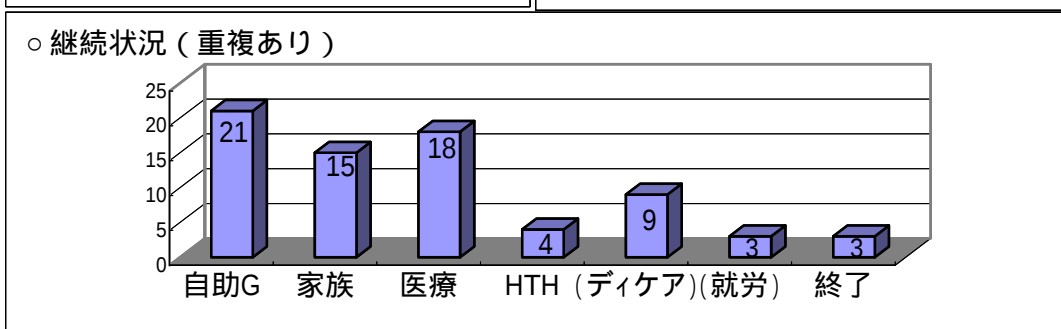
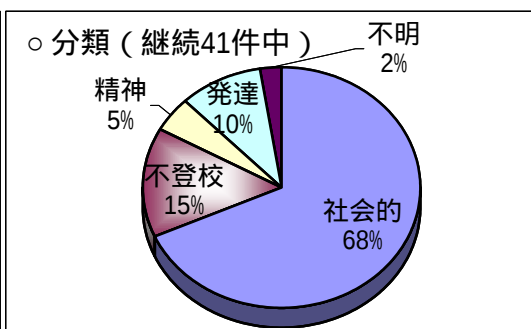
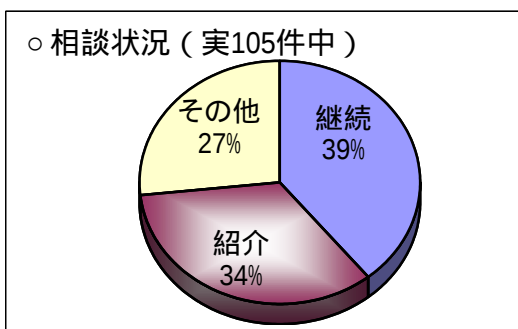
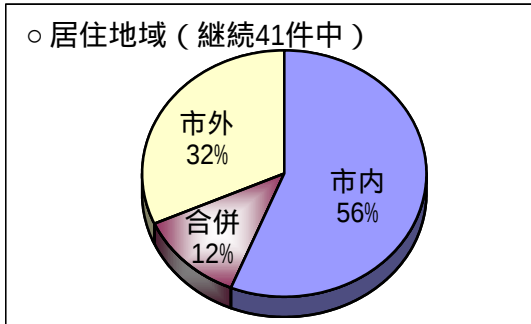
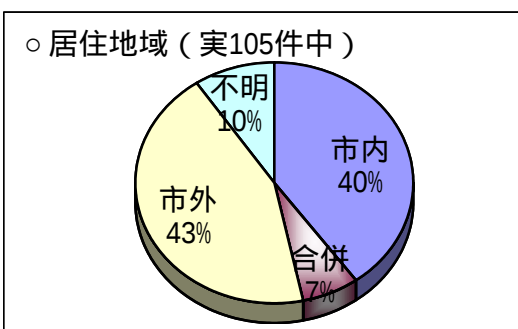
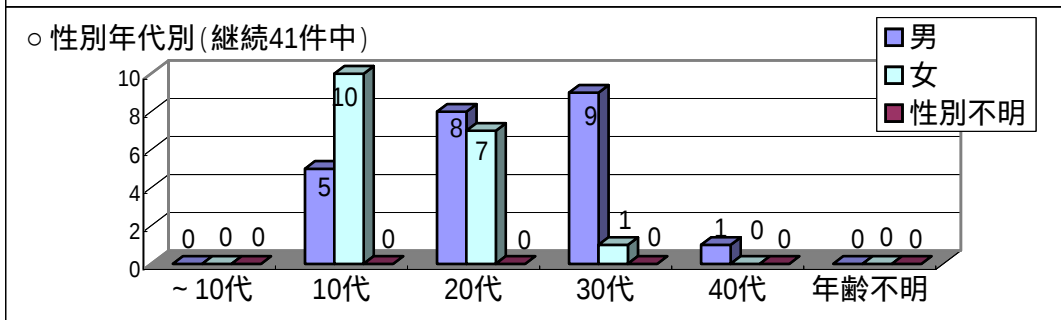
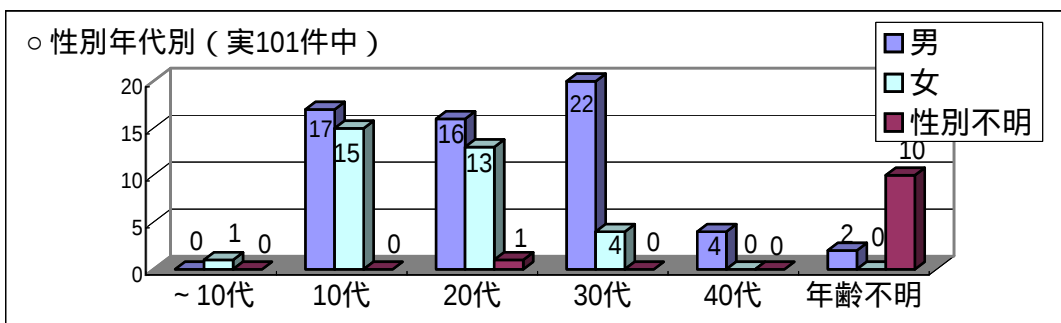


○ 相談者（初回）



○ 相談者（延べ）





(資料 3)

○家族会 (ほっこり会) 実績

実施日	対象家族数	実数	出席者				外来講師
			母	父	両親	その他	
H16.4.13	16	10	5	1	2	0	
H16.5.11	16	12	6	0	3	0	
H16.6.8	18	13	7	2	2	0	
H16.7.13	19	17	7	2	4	0	
H16.8.10	20	12	3	3	3	0	
H16.9.14	20	16	8	2	3	0	
H16.10.12	19	18	6	2	5	0	
H16.11.9	19	13	6	1	3	0	
H16.12.2	19	11	3	2	3	0	
H16.12.14	20	16	5	3	4	0	
H17.1.11	20	13	6	6	1	0	
H17.2.8	21	13	7	2	2	0	
H17.3.8	21	15	6	1	4	0	

ほっこり会発足式

H16.5.28	16	15	6	1	4	0	寺沢、酒井、エルシティオ職員
----------	----	----	---	---	---	---	----------------

エルシティオ交流会

H16.9.23	20	12	5	1	3	0	寺沢
----------	----	----	---	---	---	---	----

エルシティオ主催 映画『青の塔』鑑賞会

H16.12.18	20	6	2	0	2	0	
-----------	----	---	---	---	---	---	--

体験発表会 (京都オレンジの会)

H16.12.19	20	21	6	2	6	1	寺沢、布袋、酒井、谷、山本朗
-----------	----	----	---	---	---	---	----------------

○家族会 (女性の会) 実績

実施日	対象家族数	実数	出席者				外来講師
			母	父	両親	その他	
H16.7.27	5	4	4	0	0	0	
H16.8.24	5	3	3	0	0	0	
H16.9.28	5	4	4	0	0	0	
H16.10.26	6	6	6	0	0	0	
H16.11.30	6	5	5	0	0	0	
H17.1.25	6	5	5	0	0	0	
H17.3.22	6	2	2	0	0	0	

(資料4)

○自助グループ実績

実施日	『テーマ』、様子	出席者	実数	対象数
H16.4.15	午前『仕事のリタイア、コンプレックス』	6	6	7
H16.5.18	午前『幼児期、合コン、病院、服薬』	6	6	
H16.6.15	午前『携帯電話、インターネット、長崎の事件』	4	4	
	午後『自助の経緯、食事会』	4	4	
H16.6.29	午前『起床時間、バイト、HTHの講座』	5	5	
	午後『話題提供の方法、名前の確認、席の配置』	5		
	カラオケ 希望者のみ参加	4		
H16.7.20	午前『ディや自助に関わりどういう意識になったか』	6	7	8
	午後『ひきこもって考えること、豊かさについて』	6		
H16.8.3	午前『自助に関わるようになって、自助の時間、内容について』	10	10	11
	午後『アイドル、遊び、自助の立ち上げについて』	7		
H16.8.17	午前『お盆の過ごし方、風水について』	10	10	15
	午後『映画青の塔について、親、家族について、ひきこもる心理』	7		
H16.9.7	午前『テーマを決めること、自助の成り立ち』	8	8	16
H16.9.21	午前『他者紹介、自助の中での関係』	11	12	
	午後『都会との違い』	7		
	食事会 希望者のみ参加	7		
H16.10.5	緊急 メンバーの関わりについて	4	12	
	ふたば米川氏より「わらび座」公演紹介	10		
H16.10.19	午後 NHKより取材依頼	7	8	17
	午前『深い話、浅い話』	7		
H16.11.2	午後『沈黙について、ここ1週間で嫌だったこと』	7	12	19
	午前 SST『学校で嫌だったこと、面白くなかったこと』	8		
H16.11.16	午後 SST『家族ってなーに?』	8	9	20
	午前 SST『家族ってなーに?』NHK取材	6		
H16.12.7	午後 SST『ひきこもりについて』	7	11	21
	午前 SST『生きるとは?幸せとは?』	7		
H16.12.21	午後 SST『自分を大切にとは?』	7	10	21
	午前 SST『昼夜逆転、ひきこもりについて』 自助のルールを確認	8		
H17.1.18	テーマ決め	6	8	21
	午後 SST『人との関わり、関わりの難しさ』	8		
	新年会 自助会について	5		
H17.2.1	交流会に向けての準備	5	7	21
	午後	7		
H17.2.10	交流会に向けての準備	5	5	21
	午後	5		
H17.2.15	交流会に向けての準備	5	6	21
	午後	5		
H17.2.22	交流会 京都オレンジの会(8名)、おーまきちまき氏参加	6	7	21
	食事会 田辺市ひきこもり検討委員(4名)、ほっこり会(1名)招待 体験発表 場所: 古道ヶ丘	6		
H17.3.1	交流会のビデオ鑑賞	5	5	21
	午後 交流会について、家族について	5		
H17.3.15	午前『自助に来れない人について』	4	5	21
	午後『自分を大切にすること、相手を大切にすること』 長谷川俊雄氏参加	4		

○自助グループ(女性の会)実績

実施日	『テーマ』、様子	出席者	実数	対象数
H16.10.26	午前 自己紹介、趣味、『うれしかったこと、なかったこと』	4	4	6
H16.11.30	午前 『学校で嫌だったこと、アルバイト、家族について』	5	5	
H17.1.25	午前 『コンプレックスについて』	6	6	7
H17.3.22	午前 『ひきこもりに関する事件について、家族について』	1	1	

○自助グループ(30代の会)実績

実施日	『テーマ』、様子	出席者	実数	対象数
H17.2.10	午後 自己紹介、『仕事について』	3	3	5
H17.3.10	午後 『ひきこもりについて』	1	1	

(資料 4 -)

スケジュール

(第1部)

1. はじめのあいさつ
2. 協力者の紹介
3. 本日のスケジュールの説明
4. 自己紹介 (名前と一言)
5. 田辺市自助会の紹介
6. 京都オレンジの会の紹介
7. 歌とお話 おーまきちまきさん
みんなで、 “ イマココニイルヨ ”
8. 体験発表 2 名
田辺市自助会
京都オレンジの会
9. 協力者から一言
10. おわりのあいさつ

(第2部)

1. あいさつ
2. 歓談
3. 体験発表 2 名
田辺市自助会
京都オレンジの会
4. おわりに・・・

(資料 4 -)

自助会の紹介(寸劇のシナリオ)

あるディケア(ハートツリーハウス)の日

A : 「前に知り合いの大工さんの手伝いをしたけどもその仕事がかびになって、またやりたいということを伝えたかったけどその時、目をあわせられなかった。」

B : 「私もそういうときがあったから分かるよ。ゆっくり慣れていったらいいんとちがうんか？」

A : 「そんなもんかなー。腹が立つとお母さんにも当たってしまう。」

B : 「どんな風に当たるん？」

A : 「飯が自分の食いたいもんとちがうんや。今日はとんかつやったけど食べたいものと違ったんや。」

B : 「私は家では誰とも話す人がいないんや。いつも一人で考えなければならぬいから、当たる人がいていいねー。」

～A(？の顔をする) B、目良に視線を配る～

目 : 「Bさんはいつも料理しているんだね。」

B : 「私はお母さんいないから」

A : 「僕は甘えているんかな - 。」

(シーン)

目 : 「C君はどうだった？」

C : 「若いときはみんなそんなもんだよ。」

B : 「ディケアに何度か参加してきたけれどこのようにメンバー同士で会話が広がったのは、このときが初めてでした。以前から心の内を語り合う場が必要だと思っていた私は目良さんにさっそく相談しました。ディケアの中で提案してみましたが、気持ちがうまく伝わらず再度目良さんに相談した結果田辺市で開いてくれることになりました。」

A : 「僕もそういう場が必要だと思いました。平成16年1月から自助会として集まり始めましたが最初は3人。今は約20人くらいメンバーがいますが集まるのは一日10人くらいです。月に1回から2回に増え、また月に1回女の子の会や30代の会があります。話は最初は続かないし僕としてはよく切れました。最近はみんなでテーマを決めて話し合うこともあり人の話を聞くことも大事ななあと思っています。少しずつ人と人のつながりが広がり始め、プライベートで食事やカラオケ、ドライブ、ショッピング、僕の家遊びに来てくれた等、行動も広がってきています。」

B : 「私たちにとって自助会は人と人との心をつなぐ会であり心のすき間を埋めてくれるものです。人が集まればぶつかり合うこともあるけれど自分を主張するだけでなく、周りの人のことも考えて話し合い、折り合いをつけていく中で人の温もりをたくさん感じる事が出来る場です。私たちにとって心の栄養をもらう場でもあります。人が寄ればお互い色々な面を持っているけれど足りないところは補い合ったり人の良い面を発見して吸収したりして、将来的に社会で自立していく力をつけるためのところだと思います。今は小さな社会だけどこの中で力をつけていきたいと思っています。今は目良さん、松下さんの力を借りているけれどこの会がいつかは自分たちだけで歩いていける場になることを目指しています。」

(資料 4 -)

～ 体験発表原稿 ～

私の家は、私が生まれたときから経済的に苦しい家庭でした。父は県外に出稼ぎにいった、普段は家にいませんでした。留守を守らなければならないはずの母は夜さえも留守がちで、たまに家にいるときは、男の子には優しいけれど、女の子には厳しくて、私はよく髪を引っ張られたり、たたかれたりしました。そしてよく、階段から突き落とされたりしました。それでも私は、黙っていました。今思えば虐待だと思いますが、当時の私にはそのことはわかりませんでした。私には兄弟は多く、家の中はいつもにぎやかでしたが、家も小さくて、部屋数も少なかったので、みんな団子の生活で、自分の部屋を持つこともありませんでした。年の離れた姉は私たちの面倒をよく見てくれましたが、私自身も小学校低学年の頃から、お母さんの代わりに弟たちの世話や家事をしてきました。

私は、保育所や幼稚園には通っていません。

いきなり小学校から、大勢の友達の中にはいっていくことになりました。生活が苦しいのに、入学式の前日に、お父さんがランドセルを買ってくれたときは、とてもうれしくてたまりませんでした。でも入学式の当日、体調が悪くて、病院へ行くと「おたふくがぜ」といわれ、2週間くらい休むことになりました。やっと学校に行けたとき、クラスのみんなに受け入れられませんでした。学校の帰りに石をぶつけられたり、学校の遊具のところに置いてあったランドセルを破かれたりして、破けたランドセルの底にガムテープをはって、学校に通いました。時々学校を休みましたが、先生はいじめを受けていることに気付いてくれませんでした。

小学校4年生の時から完全不登校になりました。いじめのことが学級会で話し合われました。いじめの相手は固定された人たちでした。

小学校6年生から少しずつ学校に行けるようになり、修学旅行や卒業式には出ました。

でも中学校は2年間完全不登校です。私には制服もありませんでした。2年間担任してくれた先生は、クラスの人を連れて家庭訪問をしてくれました。

3年生のときには、小学校からのいじめの相手とはクラスを別にしてくれました。担任の先生が新しい制服を買ってくれてすごく嬉しかったです。やっと学校に行ける様になりました。

3年生の終わり頃、約1ヶ月間猛勉強をして、定時制高校へ進学しました。昼間は働きながら、不登校の弟に付いて小学校へ行ったり、家事をしたり、忙しい毎日でした。でも勉強も頑張って4年間のところ3年間で卒業しました。

卒業した後も約2年間働きながら、弟の中学校へ行ったり、家事をしたりしてきました。弟も中学3年生から友だちができて自分で学校に行けるようになり、ほっとしました。

でも、私は疲れ果てて、寝込んでしまいました。

友だち関係でも、色々ありました。友だちがリストカットした時に、私はあわてて駆けつけました。でも、その友達から「死ね！」と言われて、落ち込みました。夜中に不安が強くなって、別の友だちに連絡を取りました。友達は朝まで付き合ってくれました。仕事も休んでくれました。でも、死にたいという気持ちが強くて、夜よく海の方へ足を運んでいました。電話の電源を切り、田辺中を歩き回っている私を、友達は探し回ってくれて、とうとう見つかったも、私は友達のいうことを聞かず、歩くことをやめませんでした。でも大切な友だちが電話をかけてくれ、ラーメンを食べに行こうよと言ってくれ、朝まで、私が落ち込むのを止めるまで、ずっとそばにいてくれました。

ついに、仕事を辞めることになり、家にひきこもることになりました。

そして、だいぶ先になって、その友達と会うことができました。その友だちが結婚する前に、私は「あの時私が海に飛び込んでいたら、どうした？」と聞くと、友達は「私も飛び込んでいた」と言ってくれました。それから、私は死ぬことをあきらめました。

2年半ほど前、弟の関係で出入りしていた教育研究所の先生に相談したことから、以前仕事をしていた頃に一度倒れてお世話になった病院の先生につながりました。

現在は、田辺市の相談窓口で、定期的に相談の時間をもってもらいながら、最初はハートツリーハウスのデイケアに通い、今は田辺市の自助会に参加しています。

『死ぬこと』は、一番大変なことだけど、目良さんが、「生きるのも死ぬのも、選ぶのは、あなた自身だ。でも、私はあなたにこうして出会ったのだから、私はあなたに生きていて欲しい」と言われ、私は、「生きていくこと」は大切だと実感しました。私にとっては、相談を続けていることが大きいと思っていますが、自助会で仲間と語り合う楽しさも感じているこの頃です。

(資料 5)

○ひきこもりディケア (窓口から1名参加)

年.月.日	内 容	参加人数	年.月.日	内 容	参加人数
H16.4.7	花見 (高山寺)	5	H16.10.6	共同参画ルーム	1
H16.4.14	共同参画ルーム	4	H16.10.13	共同参画ルーム	3
H16.4.21	共同参画ルーム	3	H16.10.27	共同参画ルーム 松茸ご飯	2 3
H16.5.12	共同参画ルーム 天神崎	2 4	H16.11.10	共同参画ルーム	4
H16.5.19	共同参画ルーム	3	H16.11.17	共同参画ルーム 紙すき	1 1
H16.5.26	共同参画ルーム お好み焼き	2 3	H16.11.24	共同参画ルーム コロッケ	3 2
H16.6.2	共同参画ルーム	2	H16.12.1	共同参画ルーム	3
H16.6.9	バスピン	4	H16.12.8	クリスマスリース作り	2
H16.6.16	共同参画ルーム	2	H16.12.15	共同参画ルーム	3
H16.6.23	共同参画ルーム	3	H16.12.22	共同参画ルーム クリスマス料理	2 2
H16.6.30	共同参画ルーム そうめん、うなぎ丼	2 3	H17.1.5	共同参画ルーム	2
H16.7.7	共同参画ルーム 絵手紙	1 3	H17.1.12	共同参画ルーム 書き初め	1 1
H16.7.14	共同参画ルーム	2	H17.1.19	共同参画ルーム	3
H16.7.21	共同参画ルーム ハーベキュー	3 3	H17.1.26	共同参画ルーム 水炊き	3 2
H16.7.28	共同参画ルーム	2	H17.2.2	共同参画ルーム	2
H16.8.4	ビデオ	3	H17.2.9	共同参画ルーム	5
H16.8.18	共同参画ルーム	4	H17.2.16	共同参画ルーム	4
H16.8.25	そうめん、アイスクリーム	4	H17.2.23	共同参画ルーム クッキー	1 2
H16.9.1	共同参画ルーム	4	H17.3.2	共同参画ルーム	3
H16.9.8	共同参画ルーム 田辺市立美術館	1 1	H17.3.9	共同参画ルーム	3
H16.9.15	共同参画ルーム	5	H17.3.16	共同参画ルーム	3
H16.9.22	共同参画ルーム	2	H17.3.23	共同参画ルーム	0
			H17.3.30	共同参画ルーム スパゲティー	1 2

(資料 6)

○就労への関わり

ハートツリーハウスが委託契約をしている紀南障害者就業・生活支援センターでの就労支援

4月～8月	1名
9月	1名(1名) ()は体験
10月～11月	2名
12月～	1名

(資料 7)

○ひきこもりに関する啓発活動

H16.4.18	京都オレンジの会 「ひきこもりを考える集い」	80人
H16.5.6	湯浅保健所 「思春期の引きこもり・不登校への取り組み」	16人
H16.6.6	神戸オレンジの会 講演会「田辺市における“ひきこもりネットワーク”」 意見交流会	50人 19人
H16.8.28	第9回登校拒否・不登校全国のつどい 「医療・福祉とのかかわり」	15人
H16.8.29	第9回登校拒否・不登校全国のつどい 「医療・福祉とのかかわり」	21人
H16.9.20	岩出、那賀教育会館 勉強会	7人
H16.11.4	第45回日本児童青年精神医学会 「和歌山県T市におけるひきこもり支援ネットワーク」 ～3年間の取り組みを振り返って～	約20人
H16.11.12	大阪府立こころの健康総合センター 「田辺市の実践」	約30人
H16.11.26	全国地域生活支援～きのくに（和歌山）大会 第5分科会 テーマ：保健、医療の立場から地域支援を考える 「社会的ひきこもり 相談支援の実践」	約30人
H17.2.6	第4回和歌山県作業所問題研究交流集会 第8分科会 テーマ：社会参加を困難にしている青年たちの問題 「田辺市のひきこもり支援について」	18人
H17.3.12	姫路保健所 「田辺市ひきこもり相談窓口の取組状況及び地域支援との連携」	44人
H17.3.30	高野口保健所 「田辺地方にみるひきこもり者支援について」	23人

○その他啓発活動

- ・ 田辺市ひきこもり相談窓口ホームページ（平成16年4月30日開設）
アクセス件数（平成16年4月27日～平成17年3月31日） 5012件
- ・ 紀伊民報（ホームページ紹介記事）（長谷川俊雄氏記事）
- ・ 生活ニュース（ホームページ紹介記事）
- ・ 読売新聞（ホームページ紹介記事）
- ・ 朝日新聞（窓口紹介記事）
- ・ 山陽新聞（窓口紹介記事）

- ・ 神戸オレンジの会 記念冊子の投稿
- ・ 名古屋オレンジの会 冊子「ひきこもり対策実践講座」の前文
- ・ 月刊 ぜんかれん（2004年6月号）
「市役所『ひきこもり相談窓口』を中心とした相談・支援から見えてくるもの」
- ・ 保健師業務要覧
「思春期保健 ひきこもり」

○視察・問い合わせ先

視察・訪問・調査

- ・ 青森市議会共産党会派 5人
- ・ 奈良県精神保健福祉センター 1人
- ・ アジール（ひきこもり支援団体） 1人
- ・ 大阪体育大学 2人
- ・ 林友の会 3人
- ・ 東海市議会公明党会派 4人
- ・ 八尾保健所 6人
- ・ 市町村合併に伴う住民参加型の日常生活圏域の設定と保健福祉サービスの提供体制のあり方に関する研究 2人

取材

- ・ NHK厚生文化事業団
- ・ 岡山山陽新聞社

問い合わせ

- ・ 名古屋市民民主党会派
- ・ 香川県障害福祉課
- ・ 鳥取県健康対策課
- ・ 大分市保健所
- ・ 北海道NHK
- ・ 人類学者ウェイラン
- ・ NHK大阪放送局

資料 8 -

思春期講演会

演題：「現代の青少年のこころの問題」～子どもがわからない大人達へ～

講師：東海大相模中学高校長、医学博士 山崎晃資 氏

平成 17 年 1 月 9 日 紀南文化会館 4F 小ホール PM1：30～PM4：00

参加者： 150 人（一般及び関係者）

講演内容

長年、児童精神科医として臨床を行ってきたが、中高大一貫教育を行っている東海大学付属相模中学校・高等学校の校長を兼務して、最近の児童生徒の現状を観察していると、さまざまなことが考えられる。また、臨床の場面には、これまでの児童精神医学の教科書に書かれていなかったケースが増えてきているように思う。

親や教師に対する恨み辛み。これまでに自分が受けてきた辛い体験を思い出し、それに逐一値段をつけて親に支払いを求めているケースがある。ペットが死んだのは環境汚染のせいだと言いつのる。このような奇妙な金銭感覚、奇妙な恨み方をする子が多くなってきている。このような子どもの要求はおとなにとって受け入れられるものではない。しかし、このような子どもとゲームやアニメなどの話をしている時には、笑顔をみせて、子どもらしさを見せる。ところが、どうして家で暴れるのかとか、なぜ親や教師にそれほどの恨みを抱いているのかという話になると表情が変わる。紅潮し、硬くなり、上目遣いになり、過去に受けた被害的体験を一気に話し出す。どのように理解したらよいのか、考えこんでしまうことがしばしばである。

学級崩壊。キレル子どもが話題になっているが、AD/HD（注意欠陥/多動性障害）に対する誤解が多い。AD/HD は心理的原因によるものではない。学校では、問題児がいるとすべて AD/HD と考えられがちであるが、これは大きな間違いである。AD/HD の子どもは、他の子どもにそそのかされイタズラをし、騒ぎが大きくなったときに常につかまってしまう。ある意味では、おっちょこちょいなところがある。キレルという現象は、衝動のコントロールがきかないということである。現代の子どもは、犬や猫のマーキングのように狭い領域の中では安住している。自分の領海の中ではにこやかにしているが、そこに不用意に誰かが入ってくると収拾がつかなくなる。非常に敏感、繊細、臆病、不安である。なぜそうなるのかという原因は、多分、乳幼児期の親子関係における同調性の乏しさと感がえられるが、他者を信じていない、信じられないようにみる。

赤ちゃんは、生まれながらに笑っているように見えるが、生後 2 ヶ月くらいまでは人に

笑っているわけではなく、なにかの刺激で表情筋が収縮している状態である。しかし親は自分に笑い返していると勝手に思ってしまう。生後 3 ヶ月くらいになると、笑い返してくれるようになる。親子の親密な関係を 1 年半から 2 年くらい続けていると、赤ちゃんは親を他者から区別し、親の愛情を信じられるようになる。人を信じることができるからこそ子どもは戸外に出て、他の子どもと遊ぶようになる。いろいろな経験をしてつらい思いをしても、母港（家）に帰ってきて、休息し、エネルギーを補給してまた戸外へ出て行くことができる。

親子の歯車が最初のところで噛み合っていないのではと思う例がある。最近、赤ちゃんに声かけをしない親が増えているという。これは重大な問題である。その子どもが 10 年後、20 年後にどのようなおとなになるのか心配である。現代の青年たちが持っている他者に対する不安感、緊張感、敏感さに共通するのではないか。昔は泥んこになり、やんちゃだった。喧嘩をしても、どこまでしていいのかとか暗黙のルールを学んだものである。野球やサッカーはおとなが作ったルールで行われているが、これは知識であり体得したものとは違うと思う。ストレスがかかった状態でとっさに反応しなければならない時に、知識はあまり役に立たない。身についたものでないと、とっさの反応として成り立たない。どこまでやっていいのかわからず、キレルという現象になってしまう。赤ちゃんに声かけをしないことは虐待とは言えないが、それに近い現象であり、深刻な問題である。

子どもがキレルというが、親や先生もキレやすくなってきている。行動の良し悪しや限度が身についていないおとなが多い。不登校の相談で、「せっかく不登校になったのだから、ゆっくり考えるチャンスですね」と言うが、母親は「そんなこと言ったら学校には行かなければならない」と言う。

不登校にはいろいろな要因があり、病名や疾患名ではない。学校に行っていない、行けないという状態を総称するだけのものであり、画一的にああしろ、こうしろとは言えない。

「登校刺激を与えてはいけません」と言うが、投稿刺激が必要な時もあるし、早急に精神科医療に繋げなければならないケースもある。頭が痛いと訴え不登校になっていた例で、脳腫瘍があったケースもある。一つの要因で割り切ろうとしてはいけない。心理的な問題による不登校は、対応の仕方に配慮しなければならない。「学校へ行きなさい」とってはならない」と母親に忠告すると、母親は投稿刺激を言葉では表さなくなるが、行動であらわす。わざと掃除機で子どものまわりを掃除し始めたり、お弁当を毎朝、玄関に置いていたりする。「いやみったらしいことをするくらいなら、学校へ行きなさいと言ってくれた方がましだ」と訴える子どもは多い。

子どもが成長する過程では、おとなが良いモデルである必要がある。今、「父親のようになりたい」と言う若者はいるのだろうか。現代社会は、親の働く姿を見ることができない状況にある。江戸時代には、父親が働いている地域に家族が住んでいたので、父親が何を

しているかを子どもはよく知っていたし、母親も父親をたてていた。だから、「チャンのようになりたい」という子どもがいた。現代は、両親でお互いに足を引っ張りあっている。「お前の悪いところはお父さんに似た」などと言っていないか？

青少年の犯罪。よくここまで人を信じられずに来たなと思う子どもがいる。幼い頃から、子どもと親の歯車がピタッと噛み合うように考えた育て方が必要がある。子どもが大きくなったので、今更、改善は無理かと言うとそうではない。いくつになっても子どもは成長しているものである。変わっていきける。老人になって呆けることも、人間の成長の一つである。そう思うと違う見方ができる。呆けることでその人の「らしさ」が出てくる。立派な成長である。どの人間もみんな同じではないことに目を向けなければならない。

最近、「死にたい」といって相談に来る青少年のケースが増えている。これまではなかったことである。最初は親からの相談で、本人はなかなか相談に来てくれない。ひきこもりのケースにも同じところがある。病院まで来るようになると、半分峠を越えたようなものである。共通点は他人を信じられないことであり、寂しいと訴える。生きていく上で必要な理想のモデルがないのが問題である。

不登校。「自分がおとなになって、本当に幸せになれるのか。環境破壊や災害が多く、政治もぱっとしない」と子どもから訴えられると、「そうだよな」と答えてしまう。昔だったら同じ悩みを持ったときの頃、思春期をテーマにした小説を読んで、友人と語り合って、誰しも同じ悩みを持っているのだと思い、悩みを乗り越えたものである。ヘルマンヘッセの小説を子どもに渡し、「読んでごらん」と言ってもが読んでくれはしなかった。

学校の全校集会で、「人間の命の大切さ」をどう伝えようかと考え、いろいろな話をしてみるが、どうもピタッとくるものがない。「何故生きていくのか」とか「命の尊さ」をどう伝え、今の子どもにわかってもらえるようにするにはどうすればよいのか常に悩んでいる。私は率直に自分の臨床経験の中で感じたことを話し、命は大切さを考えてもらおうとしている。今の段階では、子どもに正解を与えることはできない。しかし子どもと一緒に悩み、今相談しあったことはいつか将来何かの意味があるかもしれないと言い、二人で考え込んでしまうことはできる。こうしてみていると、児童精神医学は力がないなと感じてしまう。ふと宗教の力を借りなければならないのかと考えるときがある。どの宗教も、いわゆる教祖という人は、いろいろ悩み、修行して、黙想・瞑想して悟りの境地を開いたと思う。私は児童精神科医としてまだ悟っていないのだろう。常に青年たちと悩んでいる。

「このごろの子どもは、よくわからない」と相談される。子ども達の話す言葉、メールでよく使われる言葉など、おとなには理解しがたいものがある。メールは発信する側が考

えてもいない受け止め方をされ、誤解を生じてしまうことがある。外国からのメールには、「元気ですか」とか「有り難う」という短い挨拶、相手を思いやる言葉が書かれている。しかし、日本人は用件のみを短縮した言葉で送信するので、受け手がショックを受けることがある。

一時は、子どものことをよく理解しようとして、子どもの文化を知ろうと努力したことがある。だが、今はあきらめた。彼らの変化のスピードについて行くことができなくなった。だから、わからないことはわからないと言うようになった。彼らの話を傾聴している。そうするとうれしそうに教えてくれる。しかし最後に、「先生は何にも知らないな」と言われることを覚悟しておかなければならない。知ったかぶりをするより知らないといい、その代わりに私が知っていることを教える。

万引きや自転車泥棒が、犯罪であることを知らない子どもが多い。そのことを伝えた途端、ハッと気がついて土下座して謝る子どもがいる。親もわかっていない人が多い。本来なら、家庭で親が善悪について一つ一つ教えおかなければならぬのだが。

性的な経験。東京都のある調査では、中3の男子 12.3% 女子 9.1%、高3の男子 37.3% 女子 45.4%が性的な経験をしていた。ビックリした。統計のとりかたに問題があるのか、実際にそうなのか。どちらにせよこのようなデータのあることを、おとなは知っておかなければならない。都会の繁華街で行われている風俗業など、商売になるなら何をやってもいい時代になってしまった。この問題がはっきりとした形で現れたのがスマトラ地震の後の人身売買である。世界中の人々が地震の被災者を援助しなければならないと必死になっている時に、人の不幸を商売にしようとしている人がいることに強い憤りを感じる。「世界子ども白書・2001年」(ユニセフから出ている)の中で、ネルソン・マンデラが「世界の子どもたちへの約束」をあつく語っている。『私は愛する若いあなた方のまなざしやエネルギーに溢れた体に光を見出し、あなた方のところに希望を見出しています。未来を築くのが私ではなく、あなた方だということも知っています。私たちが犯した過ちをただし、世界とともに正しいことを推し進めるのも、私ではなくあなた方なのです。』苦悩に満ちた時代ではあるが、未来に生きる子どもたちの「復元力」を信じずにはいられない。

1対1で腰を据えてじっくり話すと子どもたちも納得する。中3の女子生徒と進学について話し合うことがあった。学校の悪口をさんざん訴えた後で、「でも学校に残りたい」と言う。教員からは「校長はあの子に騙されている」と言われたが、「おとなや教師は子どもに騙されてもいいのだ。信じてあげることが大切なのだ。しかし、おとなや教師が子どもを騙してはならない」と説明し、職員会議の意向を覆して進学させた。

どの子どもにも可能性があり、出会いがチャンスを作るきっかけになることも多い。子どもの頃、ワルで通っていた生徒が、今はある県警の少年課に勤めている。このような例

はたくさんある。

私を児童精神科医として成長させてくれたのは、私が関わってきた子どもたちである。子どもたちに感謝している。

○質問紹介

- ・ 既婚女性の 4 分の 1 が育児に対して不満を持っている。この数値をどう見るか？
- ・ 日本の子どもは外国に比べ恵まれているのにもかかわらず独特の病理性があると書いていたが？
- ・ ひきこもり支援について
- ・ 知識と会得について

○感想

- ・ 具体的な話で大変良かったと思います。お話の中で「おとなは子どもに騙されてもいい。おとなは子どもを騙してはならない。子どもを信じられなくてどうする」というところが、印象に残りました。思春期の子育て真最中の母親にとっては心強いものでした。
- ・ 親として自分の子育てを反省したり後悔したりすることが多いですが、反省するところは反省し、いいふりをしないででも自分の考えを持ちつつ・・・のおことばにホッとしました。誰でも初めから上手な親はいないのですね。ありがとうございました。
- ・ 本日はありがとうございました。毎日生徒達とつき合っている中で、これでいいのかなあと思っていることが間違っていなかったようなので安心しました。子どもたちは、こちらが信頼しないかぎり信頼してくれませんかし、注意をしてもきいてくれません。うるさがったりしてはというより生徒を好きにならないと心は通じません。少しですが、勇気が出ました。
- ・ 先生のお話しは、子育て中の私にとって参考になりました。
- ・ 大変具体的でやさしくわかりやすいお話でした。質問も先生の持てるお話を引き出すとても良いものでした。ありがとうございました。
- ・ 幅広く、具体的でたいへんわかりやすい講演でした。ありがとうございます。

- ・「教師は子どもに騙されてもいい。けれど、教師は子どもを騙してはいけない。」大変、印象に残りました。
- ・もっと考えます。よかった。
- ・子どもを信頼したい。しています。
- ・とってもいいお話でした。
- ・2児の子どもを持つ親として、子どもとの関わりにいつも悩み、考え、だけど楽しんでいきます。同じ親から産まれたのに子どもってそれぞれ性格が違うんですよ。私は一人っ子で育ったため、今そういうことにすごく不思議さと感動を感じております。えこひいきはだめだけど、それぞれへの接し方にいつも気を付けています。私の子育ては正しいのか間違っているのか悩んだ時期もありました。でも、人間十人十色。家庭もそれぞれのカラーがあっていいんだということを知ってから子育てを楽しめるようになりました。今後うちの子どもは難しいと言われる年頃に突入していきます。息詰まった時、いろんな方に助けて頂いて乗り越えていきます。というか今日の話を聞いて乗り越えていけそうだなと勇気が湧いてきました。ありがとうございました。
- ・長男（中1）が不登校予備軍になっているのでこの講演会に参加させて頂きました。学校には行ったり行かなかったりです。学校へ行かないので小学校の頃はまあまあ出来たのに今は勉強についていけないみたいです。へんなプライドがあるのか私には勉強を教えてもらえないみたいです。「塾へ行ったら」って言ったらうるさいと言って暴力をふるいにきます。長男の部屋に入ったら出て行けといわれて暴力を振るわれました。最後に子どもを信じられるか・・・大変だろうけどがんばります。
- ・学校に講演会のお知らせの電話をいただきありがとうございました。若い人のことを「同じ日本人と思わない。日本語の上手な外国人と考える」ということがおもしろかったです。（私自身にも当てはまるかも知れませんが・・・）子どものことを信じるおとなの存在の大切さについてもお話されていて、本当にそうなんだなあと思いました。
- ・最後まで楽しく興味深く聞かせて頂きありがとうございました。
- ・教師や親は子どもに騙されてもいい・・・。子どもを信じる事が大切。この言葉がとても心に残りました。

- ・私は高校教師をこの地でしています。先生は経験したことを具体的に話して下さったので、とても興味深く思いました。話の中では、うちの生徒と共通することも多々ありました。若者たちと接する姿勢はカウンセリング・テクニクというより、人間とどう関わるか、人柄の出たものを感じました。とても共感できました。また、あさってから生徒と楽しく向き合えそうです。
- ・今日は、素敵なお話、ありがとうございました。保健師として仕事をする中でもそうですが私生活の中でも思春期の子どもと接する中で、悩んでおりました。今日のお話の中で、子どもに対して申し訳ない接し方もしていたわけで、あらためて、考えさせられました。「子どもを信じて、子どもにウソをつかない」を言い聞かせて公私ともにがんばっていきたい、と少し気持ちが明るくなりました。また、こういう機会があれば市外の者ですが参加させて頂けたらと思います。よろしくお願いします。

南紀白浜の旅 - こころの友・知音 -

山崎 晃資

一月八～九日の二日間、和歌山県田辺市の講演会に招かれ、南紀白浜へ旅した。半年以上も前に、和歌山の友人から「白浜の温泉に宿をとるので・・・」と誘われており、正月早々温泉でゆっくりするのもよいかと思い講演を引き受けていた。例によって、年末年始はたまりにたまった原稿書きにおわれ、ほっとしたところで羽田を飛び立った。

南紀白浜空港に降り立つと陽の光も暖かく、南国的な風景にこころがなごむ。迎えに来てくれた田辺市の保健師Mさんと福祉施設の園長T氏に案内されて、空港近くのホテルでお茶を飲みながら予定を打ち合わせた。その日は夕方までフリーなので、どこかへ案内したいといわれ、結局、南方熊楠記念館にまず立ち寄ることになった。

南方熊楠については、大英博物館で研究に没頭し、世界的に有名な科学雑誌「ネイチュア」に数多くの論文を発表した博覧強記の天才・奇人であったということくらいの知識しか持っていなかった私は、軽い気持ちで訪れた。案内してくれたT氏は熊楠について、要所所を丁寧に説明してくれた。

ロンドン時代には、飼い猫があきれて家を捨てたという程の貧困のなかで熊楠は十数カ国の言葉を使いこなし、植物学、民俗学に秀で、とくに粘菌に関する研究では当時の世界的水準をはるかに凌駕する業績を挙げていた。津本陽の「巨人伝」によると（以下『』内は引用）、当時、熊楠の業績は、『白人の領土内でアジア人の手によって発見された生物学上の世界最初の発見』と評されていた。また、昭和天皇が神島（田辺湾内にある天然記念物）にお越しになった際には、百十点余りの粘菌の標本をキャラメル箱に入れて御進献したことは、熊楠らしさのあらわれとして今に語り継がれる有名なエピソードである。

熊楠は、明治十七年七月、東京大学予備門に入学した。同級生には正岡常規（後の子規）、塩原金之助（後の夏目漱石）などがいた。子規は幾何学の試験で及第点に達せず、熊楠も代数の成績が悪く落第した。『儂は、杓子定規ではかるような、せせこましい大学の勉強はできん。ほんなら、いっそ思いきって外国へ渡って自由に学問ひて、世界の学界にわが名をあげたらええ。狭い日本でごたごたと気に染まん仕事をひてるより、東海散士（筆者注：旧会津藩の出身で、憂国の志士。衆議院議員。本名は柴四郎）のいうように、むしろ一尺の国権を外に暢ばせばええのや』と退学した。

私が強くこころを打たれたのは、熊楠と孫文の交友のあり方であった。明治三十年三月、熊楠は大英博物館の東洋部図書部長のダグラス卿の部屋で、当時の支那の革命家・孫文に出会った。同じ年の二人は意気投合し、時間の許す限り語り合ったという。孫文との交友に関するコーナーに、孫文が熊楠に送った言葉が展示されていた。それは、六月二十七日、孫文が熊楠の小型の日記帳に、『海外逢知音』と署名したものであった。孫文は熊楠を「知音」と書いたのである。知音は、「こころの底を打ち明けて話することができる友。こころの通じ合った無二の親友」という意味で用いられているが、その語源は中国の春秋時代にさ

かのぼる。琴の名手であった伯牙（はくが）が弾く曲を、その友人の鍾子期（しょうしき）はよく理解しており、微妙な音色の変化で伯牙の内的世界を感じ取っていたという。鍾子期の死後、伯牙は自分の琴の音色の真髄を理解してくれる友は他にはいないとして、琴の弦を切ってしまい、再び琴を弾くことはなかったという故事によっている。

『二人はたがいの志をのべあい、はげましあった。いまはどちらも、ロンドンの一隅にひっそくする東洋の貧書生であるが、やがては天にのぼる蛟竜となる日がくると、昂然と前途をゆめみた』という。『日清戦争が勃興するまえのロンドンでは、諾々として英国に追従し、ただ腰を外人に曲げることのみ上手になりし在留日本人が多いなかで、ひとり敢然と正論を吐く熊楠』に、ロンドン大学事務総長のヴィクター・デイキンスは、男としての交際をすべく、胸襟をひらいた。

「知音」という言葉がなぜか私のこころに残った。世界遺産となった紀伊山地の霊場・熊野三山の近くであるためか、万葉の昔から知られた湯壺「崎の湯」につかり、岩に打ち寄せる波を浴びながら見ほれた夕日の美しさのためか、本当にこころ休まる陶然としたひとときであった。

ちなみに田辺市は、武蔵坊弁慶が生まれた所といい伝えられている。熊野水軍の頭領であった別当湛増は、次男の弁慶の願いを聞き入れて壇ノ浦の合戦では源氏に味方し、源氏を勝利に導いたという。白浜海岸の三段壁洞窟には熊野水軍の舟隠し蹟が残っており、往事を忍ぶことができる。折しも今年のNHK大河ドラマは「義経」である。

出典：さがみ、38号、東海大学付属相模中学校・高等学校、2005年3月

資料 8 -

家族研修会

演題：「ひきこもり、その時家族は？家族支援を考える」

講師：愛知県立大学助教授、ソーシャルワーカー 長谷川俊雄 氏

平成 17 年 3 月 14 日 田辺市民総合センター 2 階大会議室 PM2：00～PM4：00

参加者： 40 人（一般及び関係者）

○当日配布資料

《前口上》

はじめに

まず二つのことを確認しておきたい。一つは、問題のない思春期（青年期）は問題であるということ。二つは、問題を抱えていない家族はないということ。この二つを前提にしながら、ぼくの経験を踏まえて、しどろもどろになりながらお話をさせていただこうと考えている。そうは言っても、上手に話せないに決まっている。お伝えしたいことの一端を少し明らかにしておきたいと思う。

「問題」の捉え方

確かに、子どもや青年の身の上に大人が言う「問題」が起きている。しかし、それは表面的に眺めたときの理解の仕方である。「問題」を分け入ってよく見ると、子どもや青年たちという存在が「問題」なのではなく、誰もが生きづらい社会状況のなかで、子どもと青年たちは自分が自分を生み出す第二の誕生期ともいえるべき思春期に、抱えきれないほどの悩みや困難に直面している現象として捉えることができる。それは、この社会が「多様な価値や存在形式を認めない」という硬直さと不自由さに固執していることを、言語的に非言語的に、明示的に暗示的に、直接的に間接的に子どもと青年たちに強要していることによって、あるいは生きていく上で自らの意思や感覚に反して身につけざるを得ないことによって、そうした現象や状態を生み出しているように思われる。子どもと青年たちは、現代の社会状況と構造に規定・影響されながら、第二の誕生期である思春期の“陣痛”として自分自身の生命や生活をかけて“自己表現”しているのではないだろうか。

当事者性の確保

子どもと青年たちが直面している悩みや困難を大人が解決してしまうことは、子どもや青年たちから自ら解決すべき課題を奪うことになってしまう。子どもと青年たちの当事者性を尊重するために、どのような工夫をしたら良いのだろうか。この問いは、子どもや青年たちをどのように見るのかという子ども観・青年観が大人に問われていることにつながっている。子どもと青年たちを、将来の日本経済に貢献できる健全な労働力として期待することや、犯罪加害者にならない

ように「問題」のない市民として成長させることを期待することだとしたら、それはその人の人間としての独自性と可能性を封殺することになってしまうだろう。思春期（青年期を含みつつ）は大人への成長過程の一段階（ライフ・ステージ）として理解されるのではなく、思春期における自らの誕生という大事業に取り組んでいる一人の人間として、大人や社会は尊敬を持って見守り迎えることが必要ではないだろうか。「生みの苦しさ」を大人の考え方とやり方によって子どもと青年たちから奪うことは、子どもと青年たちがいつまでも自分に出会える機会を奪うこととなり、独自性と可能性を試することができる誰のものでもない自分自身の人生を手にするを不可能にさせることを意味している。「べてるの家」（北海道浦河での精神障害者の地域生活実践）が大切にしている「苦勞を取り戻す」という当事者とサポーター（支援者）の実践活動から学べることは、子どもと青年たちの悩みと困難を大人や社会が予防や回避をするのではなく、しっかりと子どもと青年たちが自分自身の課題として位置づけた上で、その課題を解決するための取り組みを保障していくことが、大人や社会にできることである。しかし、それは子どもと青年たちを、ただ放っておくことではなく、また孤立させておくことでもない。大人や社会に求められているものは、“過剰な”サポートではなく、むしろ“いい加減（適切）”なサポートなのかもしれない。

コントロールではなくサポートを

同じ時代を、同じ社会を生きる「生きづらさ」をともに直面している大人として、子どもと青年たちに迷惑や余計なお世話にならないように、何かできることもあるのではないだろうか。もちろん、そこで必要になるのはサポートであってコントロールではない。しかし、この二つを見極めることは簡単そうでありながら、実はとても難しいことである。時代の推移と変化の速さは、一世代のあいだでも大きな隔たりを生んでいる。そのことを踏まえると、大人の価値観にもとづく善意に満ちた単純な働きかけであっても、それは子どもと青年たちに届かないことは明らかだろう。わからないことをわかるようにするためには何が必要になるのだろう…。その答えは、ひょっとしたらひどく簡単で単純なことかもしれない。子どもと青年たちに教えてもらうこと、子どもと青年たちといっしょに取り組むこと、そうしたことによって可能になるかもしれない。

コントロールではなくサポートであるためには、大人たちと社会がバリア・フリーとともにバリュー・フリーを指向することが求められているように思われる。実は、そのことは子どもと青年たちに限られることなく、大人が自分自身に出会い自分を大切にできるために必要な新たな契機になるかもしれない。

せつない関係性の解消

「社会的ひきこもり」に関してよく話題や議論となる一例を出してみよう。外出できることや就職することを「社会的ひきこもり」のゴールだと考えている人は多い。しかし、ぼくの援助活動のなかでは外出や就職が「社会的ひきこもり」の解消や卒業にならないことは、多くのご本人やご家族から教えていただいていた。それ以前に、そもそも「社会的ひきこもり」のゴールは当事者であるご本人のみが決定できることであり、ご家族がそのゴールを設定することはできないはずである（当事者性と他者性）。しかし、社会参加のイメージが社会的に強制されたり、ある

いは拒否することを許されず受け止めざるを得ない状況のなかで、ご本人とご家族は“根拠のない確信”つまり「社会参加」イメージを手になされてきたように思われる。ご家族とご本人、そして取り巻く社会が共通して持つ「...ねばならない」「...あるべきだ」(英語で言えば must , should) という“根拠のない確信”に呪縛されながら、ご家族とご本人が勝敗のつかないエンドレスの綱引きをしているように見えてならない。そして、その綱引きを「社会」はどのような立場や態度で傍観しているのだろうか？勝負のつかない綱引きは、具体的な結果や成果を手になできないばかりか、双方が疲労困憊することによって双方共に無力化 (powerlessness) していく。そうした関係性は「せつない」関係性と言えるだろう。そして、その「せつない」関係性をご家族とご本人にだけ担わせ続けることは、あまりにも過酷でアンフェアではないかと強く感じている。

そうした「せつない」関係性を生み出しているのは一体何か、そして誰なのか？維持・強化させているものは何か、そして誰なのか？「社会的ひきこもり」の名づけ親は精神科医の斎藤環さんである。しかし「社会的」という言葉を積極的に位置づけて説明されていないように思う。「社会的ひきこもり」の「社会的」という言葉に注目して考えてみたい。そうすることで「社会的ひきこもり」という問題は、ご本人やご家族の上に現われているけれども、それは個人的問題ではなく社会的問題として理解することを可能とさせるのではないだろうか。そのように理解しようとするときに、同じ地域(社会)に生きる私たちも、その人のその家族の個人的問題として傍観するだけではなく、何か取り組める可能性を手になすることができるかもしれない。しかし、そうしたとき、第三者としての私たち(援助職や市民など)が配慮や留意をしなければならないことがあるように思われる。それは、私たちの「良かれ」と思う理解や働きかけが、ご本人とご家族の「迷惑」(暴力)になるという可能性である。どうも、私たち自身の生き方や社会観、つまり価値観・倫理観をまず問うことから始めることが大切になるように思われて仕方がない (value free)。

1. はじめに

2. 思春期を問い直す

～現代社会と思春期との関係性に焦点をあてて～

(1) 思春期の発見・登場

近代社会とは...

社会性と社会力

歪んだ思春期を生み出す社会的メカニズム

(2) 思春期 (青年期) におけるメンタルヘルスの問題

「ライフ・ステージ」という縦軸から見た思春期 (青年期)

「場」という横軸から見た思春期 (青年期

(3) 思春期問題を理解する前提

思春期問題 (思春期問題から繋がる青年期問題を含んで) の理解・把握の仕方

メンタルヘルス (精神保健) をどのように理解するのか

「家族」をどのように理解するのか

* 問題のない思春期 (青年期) は問題である

* 問題を抱えていない家族はない

* 思春期 (青年期) 問題は家族問題である

3 . 「社会的ひきこもり」とは...

(1) 社会的ひきこもりの位置づけと現われかた

ひきこもり (状態) の類型

精神病 発達障害 社会的ひきこもり

多様な契機・経過・かたち・意味・ゴール

(2) 「悪循環」と「固定化」のメカニズム

本人の内面 (性格傾向)

自己否定感・自信のなさ・恐怖感・傷つきやすさ・他者からの評価への敏感さ

こだわり・がんこ・融通のなさ

親と子の関係性

ネガティブ・スパイラル (らせん階段を下降する構造)

社会との関係

社会が個人 (問題) に与える影響

(先入観・誤解 , 支援システムの不十分さ , 社会的規範・価値観・倫理観)

(3) 本人が直面している状態と困難

本人の状態

. 自信を失っている

. 将来に対して大きな不安感を抱えている

- .どうすれば良いかわからないでいる
- .ひそかに脱出口を探している

本人が直面している困難

- .本音と本心を表現すること
- .関係性の修復
- .外出すること
- .社会参加すること

(4) 家族が直面している状態と困難

家族の状態

- .自信を失っている
- .親類・地域・友人から孤立している（孤立傾向にある）
- .将来に対して大きな不安感を抱えている
- .どうすれば良いかわからないでいる
- .疲れ果てている・困り果てている

家族が直面している困難

- .子どもの生活状態や問題（行動）を理解できないこと
- .問題を解決方法がわからないこと・思いつかないこと
- .社会からのネガティブな評価（社会の誤った理解・評価）
- .打開策がないこと

(5) 親と子の関係性に起きていること

～ “ not control, but support ” の難しさ～

「境界」の混乱

「余計なお世話」と「適当なお世話」

～ “ コントロール ” と “ サポート ” の「違い」を自覚することの大切さ～

4. 家族支援の視点と方法

～ 子どもの支援に先立ち必要となるケア：家族（親）にできること～

(1) 親が喪失感・挫折感・不安感・焦りを持つのは当然である

→ 親のそうした状況や状態が継続すると、子どもの状態や問題も継続・強化される

そうした状況・状態を打開するために親に必要となる力

「問題（生きづらさ）」を見極める力

「問題（生きづらさ）」に正しく取り組む力

「問題（生きづらさ）」を持続ける力
「問題（生きづらさ）」の意味を変える力

（２）具体的なケアの中身

学ぶ・理解する（自己流の理解・メディアの情報を鵜呑みにしない）
原因やきっかけを必要以上に詮索しない（過去にさかのぼって犯人探しをしない）
投げ出さない（細く・長く・適度な距離を保って寄り添う）
自分自身を責めない（親だけの問題や原因ではない／自分をねぎらいほめてあげる）
子どもの問題を勝手に請け負わない（親と子どもの境界線を侵害しない）
家族全員で協力する（新たな孤立や問題を生み出さない）
ベストよりもベターをめざす（極端なゴールは手に入らない）
小さな成功を積み重ねる（見切り発車やギャンブルはしない）
失敗から学ぶ（失敗は成功のもと）
他の人の力を上手に借りる（同じ悩みを持つ仲間や安心できる援助職と向き合う）
生活上の極端なガマンや無理はしない（家族全体の生活を萎縮・不自由にさせない）

（３）家族の具体的対応

～新しい家族の創造：私の人生の主人公は「私」、子どもの人生の主人公は「子ども」～
混乱・困惑・不安・焦りに直面していることを認める
そうした気持ちを安心できる人に安心できる場所で話す
どうにかしようとするをいったん棚上げする
現状維持をまずはゴールとして位置づける
親と子のあいだで何が混乱しているのか見つけてみる
混乱していることを無理のない範囲で取り除く
新しい方法を誰かといっしょに検討する
試してみる
失敗から学ぶ
自分自身のことを、自分の生活を大切にする
縛られていたものから自由になる

（４）本人が挑戦しやすい環境の整備・創造

～「家族にできること・できないこと」、そして「できること」とは...～
「環境としての家族」の変化
～いちばん身近な社会である「家族」が安心・安全と実感できるために～
・家族相談

.家族教室

.家族会（自助グループ）

本人が「いいかげんさ」を手に入れる方法

～一人で考え抜くのではなく、「助けてという力」を育む～

.相談（カウンセリング 対話）

.グループ（同じ悩みを持つ仲間との出会いと繋がり）

社会的な条件・環境づくり

～社会が準備すること～

.価値観・社会的規範・倫理観の吟味・再検討

.ゆるやかな社会参加の「かたち」の創造

* 脱・柔「価値観」「社会的規範」「社会参加形態」

.失敗と再挑戦の保障

* 失敗を受けとめエネルギーと意欲を貯える「場」と「人」

5 . おわりに

（長谷川俊雄：ソーシャルワーカー / 愛知県立大学文学部社会福祉学科教員）

○参加者感想

- ・ 子どもの立場、親の立場、今どうすべきかわかりやすく良かったです。わかりやすくていちばんよい講演でした。
- ・ 本音と本心の話が出来たら 70%ゴールの話、とてもすばらしいと思いました。いつ自分の本音を子どもに伝えられるか、悩んでいるところなので・・・
- ・ 親のよかれは子の迷惑
- ・ 本人がいかげんに生きられるように、見守るのが大切
私にとってこの二つがとても耳の痛い、胸の痛い事でした。
- ・ 大変参考になりました。お父さんも連れてきたかったです。コントロールばかりしていた気がします。今度から少しずつサポートする側に回り、子どもだけでなく、他の家族にも伝えていきたいと思いました。子どもに親の不格好もさらけ出し、子どもの目線近くまで近づけられる様努力しないといけないなあと感じました。無理のない程度で。
- ・ ひきこもりが抱えている気持ちや問題を分かりやすく理解することができました。経験をもとに語って下さったので、聞きやすく伝わりました。もっと色々な人に聞いてもらいたいと思いました。ありがとうございました。



Hello Life from kiiminpo ●●● Hello Life from kiiminpo ●●● Hello Life from kiiminpo ●●●

本音で話し合おう

ひきこもり テーマに研修会 長谷川さんが講演

田辺市湊会津町の市民総合センターで14日、「ひきこもり研修会」が開かれた。愛知県立大学助教授でソーシャルワーカーの長谷川俊雄さんが「ひきこもり、その家族は？」家族支援を考える」をテーマに「本人と家族が本音で話し合おう」と話した。市健康増進課主催。

長谷川さんによると、ひきこもりになる人は社会に適応できないという生きづらさを正直に表現しているのだという。物事のマイナス面だけを拾って「自分は駄目」と思うようになる傾向があり、白黒をはっきりさせないと気が済まないまっすぐな性格で、何かにぶつかって挫折しやすいため、「いい加減さ」という力をどうはぐむかが大切になると話した。

ひきこもりそのものは、あまり悪いことと考えない方がよいが、ひきこもりによって親子の新たな対立が生まれることの方が問題が大きいという。

例えば、親は何とか外出させようとするが、子どもにしてみれば「それができないから、ひきこもっているんだ」ということになる。親の「良かれ」は子どもにとっては迷惑で、親が一生懸命やればやるほど、ひきこもりを強める結果を生むと言います。「そんな効果のない取り組みはいったん棚上げにした方がよい」と話した。



ひきこもりの家族支援について話す長谷川俊雄さん
(田辺市民総合センターで)

もっているんだ」ということになる。親の「良かれ」は子どもにとっては迷惑で、親が一生懸命やればやるほど、ひきこもりを強める結果を生むと言います。「そんな効果のない取り組みはいったん棚上げにした方がよい」と話した。

子どもを親の価値観でコントロールしようとするのはなく、あくまでもサポートするという心掛けが大事だと述べた。

例えば、子どもの帰りが遅かった時、「遅いじゃないの、どこへ行ってたの」としかるのとはコントロールすることになり、「心配してたよ」と言うのはサポートになるという。

「本人が本音を話せるようになれば、7割は解決したと思ってよい」と

し、そのためには、まず親が本音を話すことが重要だと話した。本音を言い合えるようになれば、「お前の悩みが分かった。どうやって解決して行こうか」と相談していけるといいます。

田辺市は2001年3月、全国に先駆け「ひきこもり相談窓口」を開設。相談件数は延べで01年度138件(実件数44件)、02年度337件(同79件)、03年度481件(同89件)、04年度は2月末までで1021件(同102件)と増え続けている。

また、昨年4月末に開設したホームページ(<http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html>)には、2月末までに477件のアクセスがあった。

電話での相談時間は月曜の午後2～4時。窓口での相談は電話予約が必要。ファクスやメールでの相談も受け付けている。電話・ファクスは0739・26・4933番、メールアドレスは shc@city.tanabe.lg.jp。

田辺市を訪問して ～熊楠のエコロジーと社会的ひきこもり支援の密接な関係性～

長谷川俊雄

3月15日(火) 講演を終えた翌日の午前中。以前から訪問を夢見ていた南方熊楠資料館を、宿から海原を眺めながら1時間歩く。沖縄のように美しい海にすいこまれそうになった。熊楠は、ぼくが青年だったとき、柳田國男や宮本常一の民俗学に惹かれて読書したなかで出会ったとてつもない巨人だった。熊楠の展示資料をゆっくりと眺めながら、あることに気がついた。熊楠は、田辺の町並みを歩きながら、その当時においてのフリーターあるいはニートだったにもかかわらず、町の多くの人から尊敬されていた。そうした文化や伝統が、田辺市の皆さんによって現在においては、「ひきこもり」をめぐる取り組みとして形を変えて行なわれているように感じられて仕方なかった。しかし、これは「初・和歌山」となったぼくの幻想かもしれない。どこかでそうした息吹が引き継がれていることを、出会った方々の言葉に、講演を聴いてくださった方々のまなざしに、確かに感じられたのだ。

14日の講演はとても緊張したことを白状せざるを得ない。それは、参加された方々が、すでに齋藤環先生・近藤直司先生・工藤定次先生などの「ひきこもり」研究や実践の一線級の講師のお話を聞かれていること、そして当日の皆さんの真剣なまなざしと日常を振り返り吟味されているような表情に、ぼくは何をどのようにお話をさせていただこうかと悩んだ。でも、悩んだって、何か特別なことがお話しできる訳ではないと開き直り、ぼくが会ってきただご家族やご本人から教えていただいたこととお話することにした。一生懸命にメモを取られる姿、同意を示されるうなずき、はたと考え込んでしまった視線…。参加された方々の言葉にならない言葉に後押しされて、何とかお話しできたことに衷心より感謝している。しかし、結果はどうだったのだろうか…？一度外気に触れた言葉はもう戻らないのだから、心配や詮索は健康に悪いのでやめようと思う。

15日は午後から自助会に参加させていただいた。突然の来訪者をどのように受け入れていただけるのだろうか、大学教員が関心を持って参加するということは相当にうさんくさいと思われるに違いないと、不安が顔を覗かせていた。しかし、そんなことは杞憂でしかなかった。自助会の部屋のドアを開けた瞬間に、ぼくも今まで何回も経験してきたと同じように、ご本人たちが醸し出す何とも言えない空気をすぐに感じ取ることができた。一言で表現すると「ゆったり、ゆっくり。しかし、深く、誠実に。」だろうか…。何が話されたかは公開することに馴染まないが、そこで語られていたテーマは“自分を大切にすることと相手を大切にすることの両立の難しさ”だったように思う。参加されている方々の行きつ戻りつする言葉が放つ輝きに、ぼくは何度も息をのんだ。現在の社会のなかで、これほど希望を感じられることができることを幸せに思った。

熊楠が説いたエコロジーつまり「生命の連鎖」の重要性を、現代にあっていっそう発展させた形で「支援・援助の連鎖」として、多くの方々の手によって取り組まれていることに驚いた。田辺に学び・田辺から発信することの重要性を深いところで実感した旅となった。2日間にお会いした多くの皆さまに感謝致します。命あれば他日！

2005.3.21

(資料 9)

○田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況

H16.4.22 平成16年度第1回ひきこもり検討小委員会 平成15年度ひきこもり支援事業実施状況 ・相談実績 ・家族会・デイケア・自助グループ実績 ・啓発活動実績 平成16年度ひきこもり相談窓口実施計画 ・予算について その他 ・ハートツリーハウスの活動紹介	H16.10.28 平成16年度第7回ひきこもり検討小委員会 ・講演会・研修会について ・自助グループの報告検討
H16.5.18 平成16年度第一回ひきこもり検討委員会 委員紹介 平成15年度ひきこもり支援事業実施状況 ・相談実績 ・家族会・デイケア・自助グループ実績 ・啓発活動実績 平成16年度ひきこもり相談窓口実施計画 ・予算について その他 ・ほっこり会の紹介 ・ハートツリーハウスの活動紹介	H16.11.11 平成16年度第8回ひきこもり検討小委員会 ・講演会・研修会について ・自助グループの報告検討
H16.5.27 平成16年度第2回ひきこもり検討小委員会 ・「不登校とひきこもり」について 見解、山本医師・目良・各委員	H16.11.18 平成16年度第二回ひきこもり検討委員会 平成16年度半期ひきこもり支援事業実施状況 ・相談・訪問・自助会・家族会・デイケア ・就労関係・問い合わせ・啓発活動実績 ・今後の予定 ・講演会・研修会・交流会 ・自助グループの報告検討 その他 ・ほっこり会活動紹介 ・ハートツリーハウスの活動報告
H16.6.24 平成16年度第3回ひきこもり検討小委員会 ・事例紹介 ・学会用資料から（山本医師）	H16.12.9 平成16年度第9回ひきこもり検討小委員会 ・講演会について ・自助グループの報告検討
H16.7.22 平成16年度第4回ひきこもり検討小委員会 ・事例検討	H17.1.27 平成16年度第10回ひきこもり検討小委員会 ・体験発表会、講演会報告 ・自助グループの報告検討
H16.8.26 平成16年度第5回ひきこもり検討小委員会 ・事例検討	H17.2.10 平成16年度第11回ひきこもり検討小委員会 ・交流会について ・研修会について ・自助グループの報告検討
H16.9.16 平成16年度第6回ひきこもり検討小委員会 ・宮本医師より「不登校とひきこもり」について ・自助グループの概略紹介 ・予算関係	H17.3.24 平成16年度第12回ひきこもり検討小委員会 ・交流会、研修会の報告 ・平成16年度のまとめ ・平成17年度にむけて

○平成16年度 田辺市「ひきこもり」検討委員名簿

委 員	氏 名	所 属
委員長	寺沢 啓三	社会福祉法人やおき福祉会
副委員長	米川 徳昭	社会福祉法人ふたば福祉会
	柳瀬 敏夫	社会福祉法人やおき福祉会
	北山 守典	〃
	野長瀬 祐樹	社会福祉法人ふたば福祉会
	谷 真美子	ハートツリーハウス
	宮本 聡	南紀福祉センター
	柳田 利典	紀南総合病院新庄別館
	酒井 滋子	知識経験のある者
	西田 孝道	〃
	布袋 太三	〃
	平谷 芳子	〃
	西川 誠	〃
	新宅 暁	ほっこり会代表
	佐藤 久美子	田辺市母子保健推進員
	上野 剛志	田辺商業高校学校
	古川 茂代	紀南児童相談所
	安川 友加里	田辺保健所
	山本 滋久	西牟婁地方教育事務所（田辺市教育研究所）
	雑賀 祐介	田辺青少年補導センター
	塩本 幹子	福祉課
	南 俊秀	学校教育課
	小郷 彰豊	社会教育課
	尾田 信俊	生涯学習課
	目良 宣子	健康増進課
オブザーバー	山本 朗	紀南総合病院新庄別館

事務局 健康増進課

計25名

○平成16年度 田辺市「ひきこもり」検討小委員名簿

委 員	氏 名	所 属
委員長	寺沢 啓三	社会福祉法人やおき福祉会
副委員長	米川 徳昭	社会福祉法人ふたば福祉会
	柳瀬 敏夫	社会福祉法人やおき福祉会
	野長瀬 祐樹	社会福祉法人ふたば福祉会
	谷 真美子	ハートツリーハウス
	宮本 聡	南紀福祉センター
	酒井 滋子	知識経験のある者
	布袋 太三	〃
	安川 友加里	田辺保健所
	南 俊秀	学校教育課
	尾田 信俊	生涯学習課
	目良 宣子	健康増進課

オブザーバー 山本 朗 紀南総合病院新庄別館

事務局 健康増進課

計12名

田辺市「ひきこもり」検討委員会設置要綱

（設置）

第1条 思春期・青年期にある者（以下「青少年」という。）にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（検討事項）

第2条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- （１）「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- （２）前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- （３）「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- （４）「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- （５）前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

（組織）

第3条 委員会は、委員25名以内で組織する。

2 委員は次に掲げる関係機関の職員のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

- （１）社会福祉法人やおき福祉会
- （２）社会福祉法人ふたば福祉会
- （３）社会保険紀南総合病院新庄別館
- （４）南紀福祉センター
- （５）田辺保健所
- （６）紀南児童相談所
- （７）田辺市教育研究所
- （８）田辺青少年補導センター
- （９）田辺市母子保健推進委員会
- （１０）知識経験ある方
- （１１）ひきこもり家族会代表
- （１２）福祉課（保育所関係）
- （１３）学校教育課（幼稚園・小・中学校関係）
- （１４）社会教育課
- （１５）生涯学習課
- （１６）健康増進課

3 委員の任期は、関係機関の担当職員等として在職する期間とする。

（会議）

第4条 委員会の会議は、保健福祉部健康増進課長が関係機関の要請その他必要に応じて招集する。

2 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。

3 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

（事務局）

第5条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

（その他）

第6条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この要綱は、平成13年度1月4日から施行する。

この要綱は、平成13年度4月1日から施行する。

この要綱は、平成16年度4月1日から施行する。

参考資料 1 日本児童青年精神医学会報告書

和歌山県 T 市におけるひきこもり支援ネットワーク

- 3 年間の取り組みを振り返って -

社会保険紀南総合病院新庄別館 精神神経科

山本 朗

(1) ネットワークについて

1) 特徴

行政，福祉，病院，市民有志等が結集し，官民一体の支援ネットワークは成立した。ネットワーク形成を可能にした一因として，地域において既に知的障害者及び精神障害者の作業所を運営する社会福祉法人，民間団体である不登校の親の会が存在し，活発に活動していた事があげられる。既存の組織を取り込むことで，ネットワークの形成及び組織間の連携が円滑に行われた。

2) 有効性

「ひきこもり」は状態像であり，多様な原因をその背景に持つため，「ひきこもり」支援の際には，各々の背景を見極めた上で，その背景に応じた支援を行う必要がある。実際，今回の「ひきこもり」相談でも「社会的ひきこもり」のみならず，精神障害，不登校，発達障害等の事例も多数みられた。従って，ネットワークに医師が参加し，その事例の診断に関与することは非常に有意義であると思われる。また我々のシステムは「ひきこもり」相談窓口を入口とし，背景に応じた支援が可能であり，さらに機関同士が円滑に連携し，当事者を支援するネットワークであると評価している。

(2) 「社会的ひきこもり」本人の状況

1) 特徴と生活状況

性別では 66.7% が男性例であり，これまでの報告同様，男性が女性より多くみられた。これは，斉藤 (1998) 1) が指摘しているように，日本においては女性と比べ男性の方が，就業・就労などの社会参加をしていないと非難されやすく，性役割のストレスも多いという事象を反映しているかもしれない。現在の年齢は 10 代後半から 30 代前半までにわたり，ひきこもり期間は男性で平均 4.4 年，女性で平均 3.4 年であった。外出状況としては「ごく限られた場所へなら単独で外出できる」例が半数以上であったが，「自宅から全く外出できない」「自室からの外出も困難」例もみられ，活動範囲は様々であった。他人との交流では「家族のみ可能」例が半数以上であった。以上のように，「社会的ひきこもり」事例の生活状況はある程度の傾向はみられるものの，多岐にわたっていた。従って，支援の際にはそれぞれの状況と必要性に応じた支援を行う事が重要であると思われる。

2) 不登校

今回の結果では5割弱の例が不登校の経験者であった。これまでの報告2)3)でも3割～6割の例が不登校経験者だと指摘されている。森田らの報告(2001)4)では不登校経験者の5年後で「就学・就労をしていない」例が23%みられた。これらの事実は、不登校とひきこもりにおける関連の存在を示唆する。ともに思春期を中心とした年代に発現し、社会参加できないという共通の状態像を示している。従って、この関連の基盤には何らかの思春期心性の病理が存在する可能性があり、その事を支援する側は念頭におく必要がある。また、「ひきこもり」予防の観点では、不登校対策が「ひきこもり」予防に繋がる可能性があり、学校、教育機関のみならず地域全体が不登校問題に取り組み、さらに不登校事例の卒業あるいは中退後のフォローのために関連機関が連携をとる事が重要である。

3) 問題行動

ひきこもり状態から二次的な問題行動が発現することは諸家1)2)3)の指摘する通りであるが、今回の事例においても約6割で何らかの問題行動が二次的に発現していた。男性例では特に器物破損や家族への暴力など粗暴行為が多く、全体の約3割にみられた。小林らの調査(2003)5)では、本人に支配的な言動があるなど家族関係に緊張のある場合、家族機能や精神的健康度が低いことが示唆されている。従って、このような事例において本人の直接支援のみならず、家族機能を調整するための家族支援も有効であると思われる。また他の問題行動として男性、女性ともに昼夜逆転、対人恐怖、強迫症状を有する例も認めた。二次的な問題行動の治療として薬物療法、精神療法といった精神科医療の関与を要する例も多いと思われる。

4) 相談形態

今回の結果では、最初の相談者は男性の約8割、女性の約6割で本人の母親であり、本人は約1割と少なかった。この事実は、支援開始時に相談機関は本人と直接関わることができない事が多く、家族が相談機関にとって本人支援の窓口となる事を示している。「社会的ひきこもり」事例では斉藤1)が「ひきこもりシステム」と名付けたように、家族機能の健康度が低下している事も多い。以上から支援初期は家族を対象とした支援が实际的であり、重要であると言える。

(3) 最後に

今回、我々の経験した「ひきこもり」特に「社会的ひきこもり」事例の特徴をまとめ、その予防と支援の在り方について考察を加えた。今回の「社会的ひきこもり」の5割弱の例で医療機関に受診歴があったが、その受診による成果は不十分であった。これは「社会的ひきこもり」支援では、既存の医療システムだけでは、その成果に限界がある事を示している。地域特性を生かした我々の支援ネットワークは設立後3年半を迎え、一定の成果を上げていると評価しているが、定量的な方法も含め何らかの形でその成果をさらに検討する機会を持ちたいと考えている。また、家族会とデイケアから出発した「社会的ひきこ

もり」支援は自助グループの形成へと発展した。今後の課題の一つは、本人の就労への道をいかに築くかという事である。今回の結果を踏まえ、ネットワークを改善し、地域における「ひきこもり」さらに「社会的ひきこもり」支援の一層の充実を図りたい。

参考文献

- 1) 斉藤環：社会的ひきこもり，PHP新書，1998
- 2) 伊藤順一郎ら：こころの健康科学研究事業「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告（ガイドライン公開版），2003
- 3) 高畑隆ら：埼玉県における「ひきこもり」の実態，精神医学 45（3）299-302，2003
- 4) 森田洋司ら：不登校に関する実態調査，平成5年度不登校生徒追跡調査報告書，2001
- 5) 小林清香ら：「社会的ひきこもり」を抱える家族に関する実態調査，精神医学 45（7），749-756，2003

参考図

○平成13年3月～平成16年3月までの状況

図1 ひきこもり本人の年齢

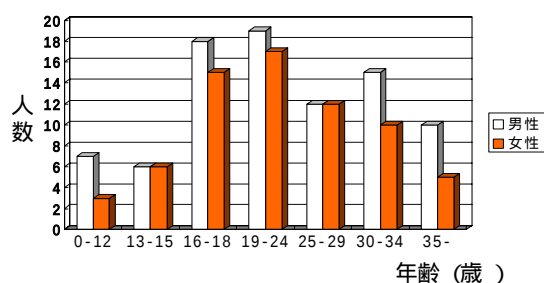


図2 ひきこもり本人の診断

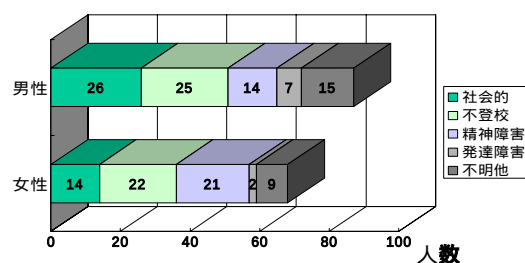


図3 初回相談者

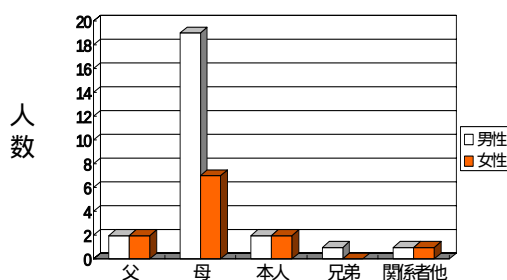


図4 居住地域

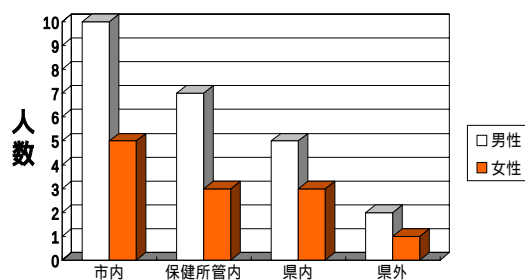


図5 社会的ひきこもりの現在年齢

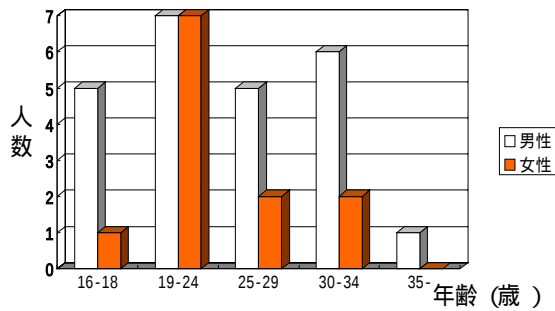


図6 社会的ひきこもりの開始年齢

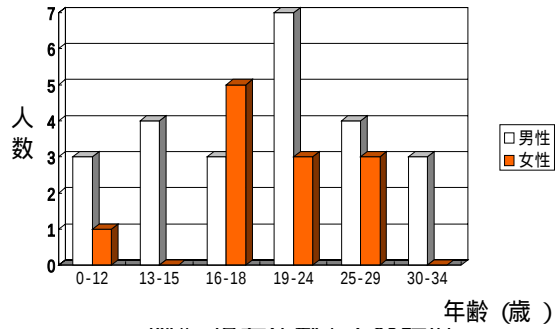


図7 ひきこもり期間

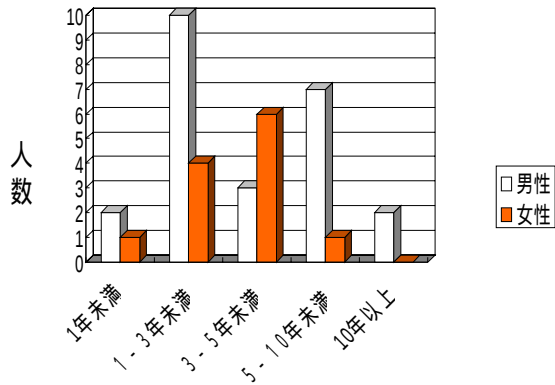


図8 現任年齢と小登校歴

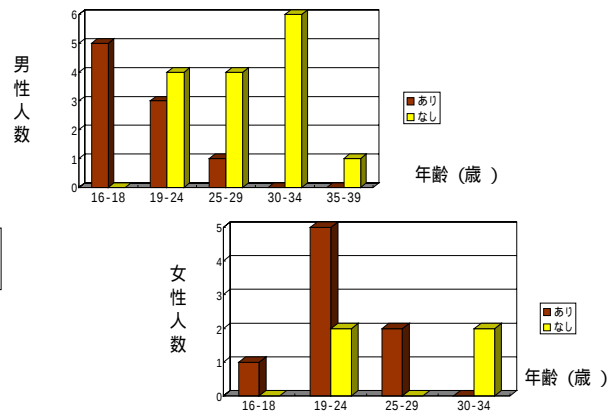


図9 外出状況

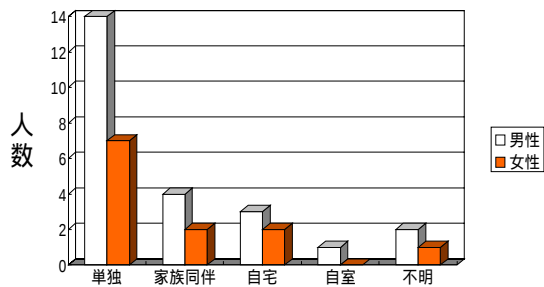


図10 交流状況

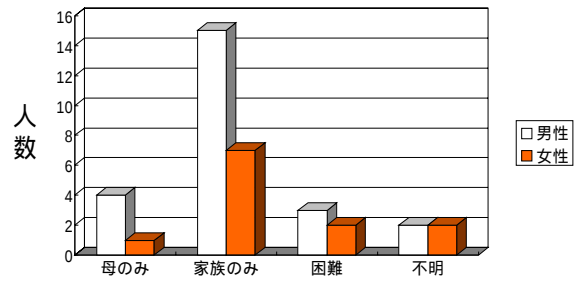


図11 問題行動

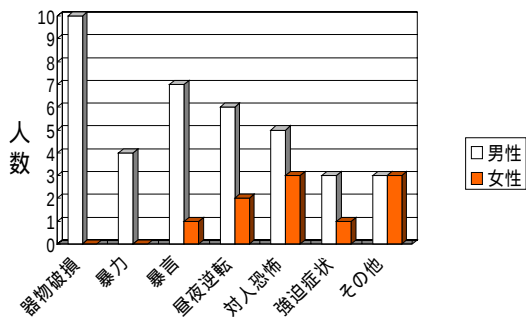
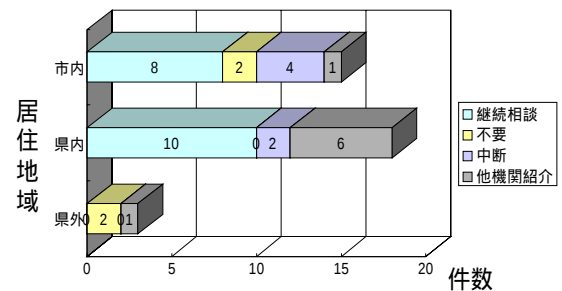


図12 処理状況



1. 「ひきこもり」の概要

近年、「ひきこもり」への社会的関心は高まっている。「ひきこもり」は単一の疾患でなく、社会参加が制限され、自宅以外での生活の場が長期にわたり失われている状態を意味する。従って、「ひきこもり」は精神疾患や発達障害、心理的ストレス等の様々な背景を持ち、結果としてその支援の際には個々の事例に応じた対応が必要である。さらに、本人が直接来所することが困難であることから、家族への支援から問題解決への糸口を見出すことになる。そして本人と専門治療機関や既存の社会資源を繋ぐシステムが必要とされる。特に狭義の精神疾患や中等度以上の精神発達遅滞に該当しない「社会的ひきこもり」に対しては、政策が確立されていないために、新たな社会資源の開発も求められている。

「ひきこもり」支援の特性として以下のことがあげられる。

- 1) 支援は長期に渡ることが多く、かつ何らかの形で支援を継続する必要がある。
- 2) 相談窓口が決まっていない場合が多く、相談機関や関係部署間で「たらいまわし」にならないような配慮が必要である。
- 2) 時には家庭内暴力等緊急性を要する場合がある。
- 3) 精神疾患や発達障害、心理的ストレス等を見極める判断力が求められる。
- 4) 相談内容は深刻な場合が多く、関わりながら理解を深めたり、徐々に本人や家族、あるいは社会とのつながりを増やしていく必要がある。
- 5) 単一機関だけでは対応が困難なので、関係機関と連携する場合には単に機関を紹介するだけでなく、関係機関が重層的に関わっていくようにする必要がある。

2. 「ひきこもり」支援の流れ

2-1 相談活動

相談の方法には、電話や面接、FAX、メール等あげられる。「ひきこもり」の相談は長期にわたることが多い。家族や本人がこれまでの対人関係の中で、相談に対して不信感や否定的な感情等を持っていることも多く、まず保健師と相談者との信頼関係作りから始める。はじめての相談が電話の場合は、電話だけでなく直接会って相談することを基本とする。

「ひきこもり」の相談は家族からの相談が大半で、本人からの直接の相談は少ない。家族からの相談の場合、相談に来ていることを本人に伝えられている場合は、家族の意識や行動の変化により、本人の面接につながり、後にデイケアや居場所、自助グループにつながる。しかし伝えられていない場合は、家庭内に波風も立たないが、膠着した状態が続き、本人の変化がみられにくい。まず家族は相談していることを本人に伝えることから始める。さらに、「ひきこもり」相談で大切なことは、必ず援助を継続していくように、次の約束をするか、適切な機関を紹介して確実に繋いでいくことである。そして、勇気を出して相談に来られたことへのねぎらいを忘れずに、「相談に来てよかった」「楽になった」「次も来た

い」と思ってもらえる関係を作っていくことである。

2 - 2 「ひきこもり」に支援に必要な知識と技術

「ひきこもり」の相談を受けたり、支援をする際に必要な知識と技術は以下のとおりである。

1) 「ひきこもり」に関する理解を深める

・厚生労働省より出されているガイドラインを熟読し、社会的ひきこもりについて正しく理解する

・「ひきこもり」を甘えやわがままと捉えない

・支援の必要性について熟知する

・相談者と根気よく付き合っていく

2) 指導ではなく相談する上での技術を身につける

・相談においては「受容と傾聴」に努める

・相談しやすい雰囲気作りを心がける

・相談を受ける保健師はバーンアウトしないように気をつける

・相談を継続し、支援につなげるため、継続的な信頼関係づくりに努める

3) 担当者の資質を向上するため、スーパーバイズを月1回程度受けられるように心がける

2 - 3 「ひきこもり」背景の見極め

相談の中で、最も重要なことは、ひきこもりの背景を見極めることである。「ひきこもり」は、図1のように分類される。

精神障害が疑われる場合には、保健所や医療機関（精神科）を、福祉サービスについては市町村の窓口等を紹介する。発達障害が疑われる場合には、児童相談所や医療機関（精神科）、市町村の窓口や福祉機関等を紹介する。不登校の場合も適切な関係機関へ紹介する。しかし高校生の場合は、学籍がなくなると所属するところがなくなるので、休学・退学と進んでいく場合には、学校と必要に応じて連絡を取りながら早期からの支援を継続する。また20歳を越えて就学或いは就労をしていない場合、必要に応じて年金等の手続きについて調整する。

「社会的ひきこもり」については、独自の支援を展開することになるが、現状では軽度発達障害（学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能広汎性発達障害等）の場合の支援を含む。なお、「社会的ひきこもり」とは、斎藤は、「20代後半までに問題化し、6ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、他の精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」¹⁾と、定義している。

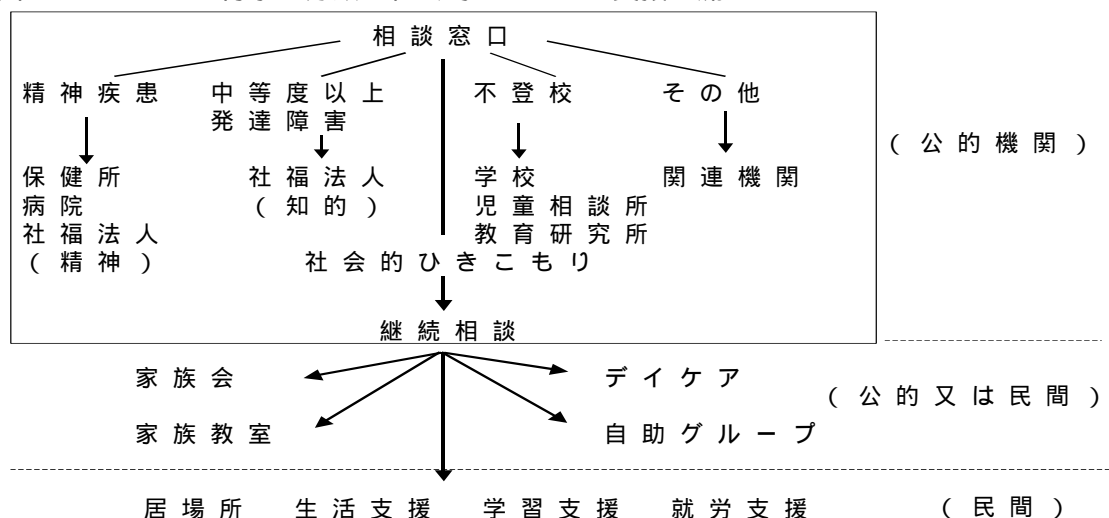
「ひきこもり」の背景を見極めるためには、以下のことが必要である。

1) ひきこもりの背景について見極める力をつける。

- ・精神疾患、精神病理について理解する（特に思春期に好発しやすい統合失調症を見落とさない）
- ・発達について理解する（思春期以降の段階においても、相談を通じて乳幼児期からの育ちのポイントを把握して判断する）
- ・軽度発達障害（学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能広汎性発達障害等）について見極めていく力をつける（養育の問題とすりかえられていることがある）
- ・虐待やいじめからのトラウマ、フラッシュバック、解離症状、人格障害等への理解をする（子育て支援としての虐待予防が大切）
- ・不登校について理解する（相談者の 6 割以上が不登校の経験者）不登校対策は予防につながる

2)「ひきこもり」から起こりうる様々な神経症状に対する対応について知る（相談の中で求められる）

図1 ひきこもり背景の分類と社会的ひきこもり支援の流れ



2 - 4 . 家族支援

家族相談の中では、家族の話に耳を傾けて、これまで工夫されてきたことを認め、今困っていることへの対応を共に考えていく。家族がこれまでの本人への育て方を否定したり、ひきこもりの原因を探すことに目を向けないで、これから取り組めることを家族とともに見出していく。また、本人の気持ちがつかめないときは、どんな気持ちなのかを共に考えていく。そして、家族の対応が変化することによって、本人に小さな変化が見られると、対応への頑張りを認めていく。さらに両親の対応が異なっていたり、意見が食い違ったりする場合には、夫婦間の調整のために両親そろって面接をする。

家族が共に支えあい学びあう場として、家族教室の開催や家族会を設立する。

2 - 5 . 本人支援

本人からの直接の相談が少ないことから、家族相談を継続していく中で、家庭内の緊張

感が和らいだり、親子のコミュニケーションが回復してきたりする頃に、「本人に会いたい」と伝えてもらう。但し親が無理に本人を引っ張り出すことは控え、無理なく会える機会を待つ。

本人と面接ができるようになると、ゆっくりとした関係作りから始める。本人が自ら語りだすのを待つ姿勢も時には大切である。会話は本人のことから遠い日常的な事柄から始め、徐々に本人の好きなことや関心の高いことへと話題を発展させていく。自己否定や自爆的な言動が見られるときも多いが、本人の気持ちを汲み、理解しようとする姿勢が求められる。また、本人が現状の中で出来ていることを認めていく。そして、本人がこれからどうしたいのかということに目を向けながら、小さな目標を設定して、共に考え少しずつ実行しながら、その達成を認めていく。本人が自宅以外に安心できる居場所や仲間を紹介していく。

2 - 6 . 集団活動（仲間作り）

2 - 6 - 1 家族会

家族会では、家庭の状態や本人の状況が似たもの同士の「出会いの場」として開設する。出来るだけ家族同士が語り合える場の雰囲気作りや調整が必要である。長期的な付き合いとなるため、その中で本人の変化に差が生じてきたときに、本人の変化が見えにくい家族にとって、かえって落ち込んだり悲観的になったりすることもあるが、継続相談の中でフォローしていく。また保健師が、家族会の活動にどっぷりかかわりすぎると、会としての自立が阻害されるので、会の中でリーダーを決めて、独自の活動が展開され、さらに家族に元気を生み出す活動に繋げていくような仕掛けが必要である。会場準備から会員への連絡等細かいことから、徐々に自分たちで企画した研修会や講演会の開催等活動を活発にしていく。

2 - 6 - 2 自助グループ

本人（メンバーという）の自助グループでは、「心の内を語り合う場がほしい」などというメンバーからの要望が出ることによって開設する。ここでは、メンバーのニーズをどう捉えていくのかがポイントである。あらかじめ用意された支援の枠組みの中からは、メンバーは受身的になりがちで、自発的な活動を引き出しにくくなる。それ故メンバー自らが動き出すことができるように、自分の思いを言葉で表現したり、行動化することができるような雰囲気や場面づくり等、常に後方支援に努める。

自助グループの中では、自分のことを相当に語れるようになったメンバーからほとんどうつむいたままそこに座っているのがやっとのメンバーまで、状況は様々ではあるが、仲間と空間や時間を共有することで、その集団の中に帰属しているという意識が芽生える。また、自助グループでの出会いから、プライベートな付き合い（カラオケやショッピングなど）に発展することもある。

保健師はグループの中或いはプライベートでの人間関係の調整役に徹する。人と衝突し

た後の調整の仕方や誤解が生じた後の修復の仕方など、これまでの対人関係の乏しさからくる困難さがある。故に、安心できる仲間の中で、何度も繰り返し体験を積み上げていくことが必要である。グループでは SST(ソーシャルスキルトレーニング)の活用が有効であると考えられる。

2 - 7 .「ひきこもり」支援ネットワーク

「ひきこもり」の相談は、その特質上複雑で長期にわたり、その相談の専門家がどの職種にあたるのかも不明確である。色々な角度から支援について検討していくために、図 2 のように、医療・保健・福祉・教育等の関係機関や NPO 団体や民間団体等官民を問わずのネットワークが機能する。そこでは、対応が困難な事例についての検討や、支援の方向性或いは家族会・居場所・デイケア・自助グループ等の必要性について検討する。関係機関や関係者が互いの職域や役割を一步踏み出した活動が、「ひきこもり」支援には不可欠である。

また、「ひきこもり」相談の 6 ～ 7 割が不登校の経験者であり、その中には幼い頃から発達課題（軽度発達障害）をもちながら、養育の問題として対応されて、本人・家族ともに傷ついていることがある。母子保健・学校保健の予防的な取組と連携、卒業後も支援の谷間を作らないように、また継続的な支援ができるよう行政内の関係機関等との連携の充実が求められる。

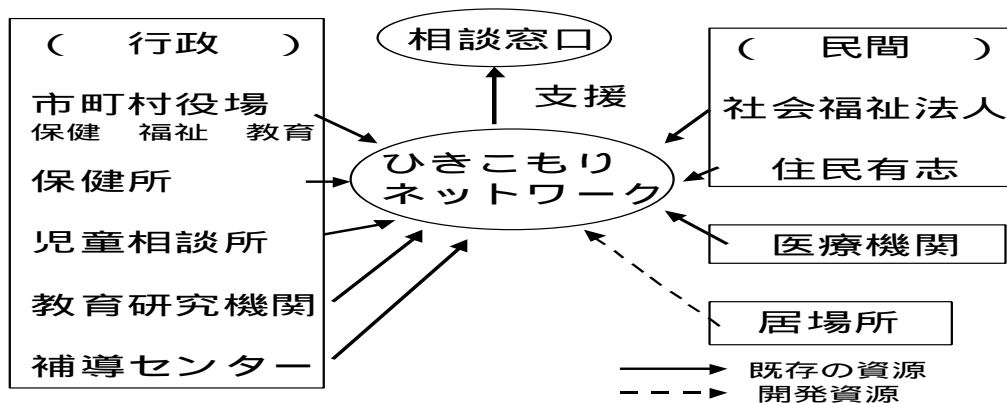
2 - 7 - 1 「ひきこもり」のネットワークに必要な知識と技術

1) 単なる連絡調整的な連携ではなく真のネットワークが図れる

- ・ 関係機関（関係者）との信頼関係を築く
- ・ 各支援機関の支援機能を互いに理解し、利用者を通して関係者の役割や動きが見える関係を築いた上での支援活動（コーディネート）を行う
- ・ 単に橋渡しの役割でなく、共にかかわり続けていく関係にする
- ・ 社会資源とその役割について理解し、適切に紹介していく（ソーシャルワーク）

2) 活用できる社会資源は目一杯活用しながら、新たな社会資源を創り出す一員（一機関）としての機能をもつ

図 2



3．緊急時の対応

3 - 1．家族への暴力が見られるとき

「ひきこもり」の状態から二次的に何らかの問題行動が発現する。特に男性では器物破損や家族への暴力など粗暴行為が多い。本人に支配的な言動があるなど家族関係に緊張のある場合、家族機能や精神的健康度が低いことが示唆されている。従って、このような事例において本人の直接支援のみならず、家族機能を調節するための家族支援も有効である。また他の問題行動として男性、女性ともに昼夜逆転、対人恐怖、強迫症状を認めた場合、二次的な問題行動の治療として薬物療法、精神療法といった精神科医療の関与を要することがある。

3 - 2．家族への暴力等犯罪行為につながる時

本人の保護として、児童福祉法・少年法・刑法・精神保健福祉法の活用がある。緊急時の支援ネットワークとして、医療機関・保健所・児童相談所・警察等が関わる。緊急対応からの処遇に至っては、引き続き支援できる体制を築き、コーディネートしていく（例えば、家族との分離、施設への入所等、本人が納得するような支援に繋げていく）。本人の現在の問題行動を、一方的な視点で捉えるのではなく、多角的に複数の目で見えていくことも大切である。

4．まとめ

「ひきこもり」支援を進める上での特に重要な視点をまとめてみると、以下のとおりである。

- 1) 信頼関係作り：受容と傾聴
- 2) 一人の人をより広く理解するための情報収集
- 3) 本人と本人を取り巻く周囲の環境的要素との調整・変革
- 4) 否定的な情報に惑わされず、活用できる社会資源を探る
- 5) 人と人・人とシステム・システムとシステムの仲介・調整
- 6) 新たな社会資源を創出するソーシャルワーク

4 - 1．今後の課題

「ひきこもり」支援が、住民のニーズを反映した取り組みへと発展していくためには、関係者の情熱だけでは限界があり、早急に国レベルの制度の創設、予算的裏づけ、人材育成が必要となる。行政機関での取り組みはデイケアや自助グループ等による人間関係づくりが限界であり、様々な状態や症状から、働きたいけれど働けない本人の就労への道をいかに築いていくかというのがこれからの課題である。

保健師は、地域の人材を捉えて、支援に必要な新たな社会資源を開発していくことに側面から関わっていくことが出来る職種である。人と人をつないでいく役割、住民のニーズ

を的確に把握し、その必要性を明確にし、それを必要とする人必要とされる人が共に手を取り合って、必要なものを生み出していくという地域の活性化につながる一役を担っていくこと、住民の視点から関わっていくことが今後の活動に求められている。

引用文献

¹⁾ 斎藤 環 (1998): 社会的ひきこもり - 終わらない思春期 . PHP新書 .

参考文献

伊藤順一郎ら (2003): こころの健康科学研究事業「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告 (ガイドライン公開版)

高畑隆ら (2003): 埼玉県における「ひきこもり」の実態 . 精神医学 45 (3) 299-302

小林清香ら (2003): 「社会的ひきこもり」を抱える家族に関する実態調査 . 精神医学 45 (7) 749-756

目良宣子 (2003): 10 代・20 代 (思春期・青年期) を中心とした「社会的ひきこもり」をめぐる保健活動の展開 . 月刊 母子保健 通巻 536 号

目良宣子 (2004): 市役所「ひきこもり相談窓口」を中心とした相談支援から見えてくるもの . 月刊ぜんかれん NO449